

博 多 176

— 博多遺跡群第229次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1419集

2 0 2 1

福岡市教育委員会

博多 176

— 博多遺跡群第229次調査の報告 —



遺跡略号 HKT-229
調査番号 1909

2021

福岡市教育委員会



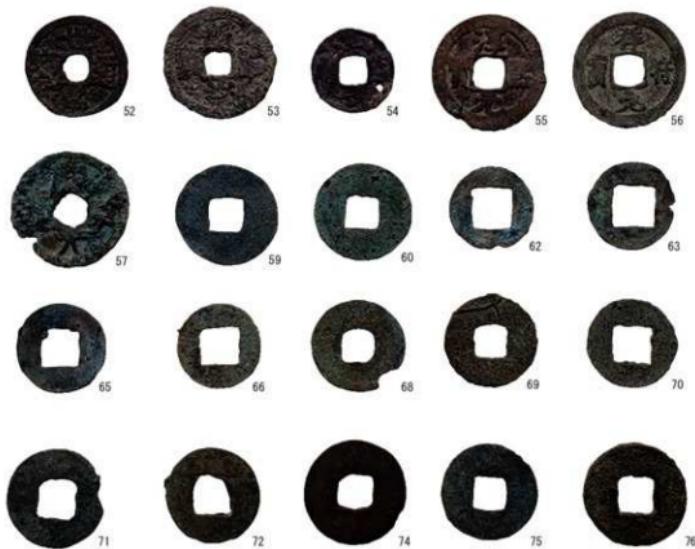
石基礎 SX001・SX004 調査風景(東より)



倣古銅器 石基礎 SX001 出土 (高さ 7.6 cm)



铸造関連遺構 SX008（北より）



铸造関連遺構 SX008 出土の銅錢（右上径 2.45 cm）



双层碗 296 I 区第 2 面出土 (口径 16.3 cm)

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、古くから交流がおこなわれてきました。なかでも博多湾に面する那珂川から御笠川一帯には、古代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、ビル建築に伴う博多遺跡群第229次発掘調査について報告するものです。この調査では中世の井戸や礎を敷き詰めた石基礎を検出するとともに、青磁などの南宋からもたらされた陶磁器や金属器などの貴重な遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明するためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、株式会社ジップ様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例 言

1. 本書は福岡市が建物建設に伴い、博多区店屋町16番1他8筆地内で発掘調査を実施した博多遺跡群第229次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理報告書作成は、受託事業として実施した。
3. 実測図作成および写真撮影の実施は、以下のとおりである。

業務内容	担当者
遺構実測図作成	常松 幹雄、藤野 雅基
遺構写真撮影	常松
遺物実測図作成	山崎 龍雄、山崎 賀代子
遺物写真撮影	常松、牛嶋 茂（巻頭図版1・3）
製図	常松、山崎 龍雄、山崎 賀代子

4. 本文に掲載した公共座標は世界測地系である。
5. 採図に掲載した方位は、真北を示す。
6. 本文中に使用した遺構略号は、以下のとおりである。
SD : 溝 SE : 井戸 SK : 土坑 SX : その他の遺構
7. 本書に関わる記録類・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
8. 調査整理報告書作成にあたり多くの方々にご支援、ご協力を賜った。出土錢貨一覧は大庭康時氏の分析をもとに作成した。巻頭の金属器・青磁は、牛嶋 茂氏（元奈良文化財研究所）の撮影による。動物遺体については新美 純子氏（名古屋大学博物館）からご所見をいただいた。
9. 本書の執筆は、常松、山崎 龍雄、新美 純子が行った。
10. 本書の編集は、常松が行った。

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	229次	調査略号	HKT-229
調査番号	1909	分布地図図幅名	049天神	遺跡登録番号	0121
調査地	福岡市博多区店屋町16番1他8筆地内		調査面積	200.86m ²	
調査期間	平成31(2019)年4月15日～令和元(2019)年7月26日				
整理期間	令和2(2020)年4月1日～令和3(2021)年3月31日				

本文目次

Iはじめ	1
1. 調査に至る経緯、2. 調査の組織	1
II位置と環境	1
III調査の記録	2
1. 調査の概要	2
2. 遺構と遺物	2
(1) 石基礎・区画溝	8
(2) 鋳造関連遺構	12
(3) 道路状遺構	18
(4) 溝状遺構	23
(5) 井戸	27
IV各論	32
1. 双層碗について	32
2. 博多遺跡群229次調査出土の美濃焼茶陶について	34
3. 博多遺跡群229次・232次調査出土の動物遺体・骨角製品	36
Vまとめ	40

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区店屋町16番1他8筆における建物建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成30年10月10日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡に含まれていること、試掘調査が実施され現地表面下160cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建築予定部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成31年4月1日付で株式会社ジップを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月15日から発掘調査を、翌令和2年度に資料整理および報告書作成をおこなうことになった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社 ジップ

調査主体：福岡市教育委員会

(発掘調査：平成31年度・資料整理：令和2年度)

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課課長 菅波 正人

同課調査第1係長 吉武 学

同課調査第2係長 大塚 紀宣(平成31年度)

藏富士 寛(令和2年度)

調査庶務：文化財活用課 松原加奈枝

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係長 本田浩二郎

同課事前審査係 文化財主事 朝岡 俊也(平成31年度)

山本 晃平(令和2年度)

調査・報告担当：同課 主任文化財主事 常松 幹雄

II 位置と環境

博多遺跡群は、博多浜と北側の沖ノ浜が大博通と明治通が交差する付近でつながっている。調査地は、博多浜の北西部、海側に緩やかに傾斜する標高5.3mの地点にあたる。

第1面 地表から1.8m下の最初の生活面では厚さ0.6mの土蔵の土壁をささえれる石基礎が検出された。その北東の赤い焼土付近では、文字のないお金、無文錢が30枚以上出土した。銅を加工する工房跡とみられる。無文錢の流通を示すものとして重要である。室町時代後期の15・16世紀頃と推定される。

第2面 地表から2.5m下の面では、南北にのびる幅5mほどの道路跡が確認された。14世紀頃から200年あまりの間、道路として使われたようで、路面はしっかりと踏み固められていた。南北にのびる道路跡はこれまでの調査成果を裏づけるものとして注目される(下の写真)。

第3面 地表から3.0m下の最終面では7基の井戸跡が検出された。直径0.6mほどの底のない桶を重ねる構造と推定される。12・13世紀の鎌倉時代頃と考えられる。

今回の調査で検出した遺構と遺物から、中世の博多を解明するうえで重要な所見がえられた。

III 調査の記録

1. 調査の概要

調査地は、間口が6m程度で奥行き35mの東西にのびる狭長な地形を呈している。これまでの調査によって東側には道路状遺構の存在が想定されたため、奥の西側（I区）から調査を着手し（図版1）廃土が一定量になったところで土砂を積出し、道路状遺構の検出を行なった。調査区の西側をI区、東側をII区と呼称するが、図5～7のB-B'が境界となっている。

図1は博多遺跡群に旧砂丘の範囲を破線で表示したものである。229次調査区は砂丘IIの西北端にあたる。図2は、世界測地系の公共座標に周辺の調査区を示したもの。図3は道路状遺構と推定線を表示したもので下記の報告書から抄出した図を使用した。（3）道路状遺構で229次の所見を主体に解説する。

2. 遺構と遺物

試掘の結果に基づき、職員の立会いの下、4月15日から表土を150cmすきとった後、作業員を入れてI区南東から掘削を開始した。調査地の標高は5.3m、第1面は3.6mで遺構検出を行なった。さっそく礎敷の建物の基礎、土坑などを確認した。礎敷の間から雷文の意匠のある銅器1、有柄の片口銅器2が出土した。連休前に全景撮影を行い、2面目の検出に着手。I区の石基礎SX004は北側と南側では30cm程度の比高差がある。

I区北東では東西2.5m×南北1.0mの範囲で焼土の分布SX008を確認。東側に炉底とみられる焼土の堆積、西側の焼土と炭を含む位置から30枚以上の無文銭を検出した。銅の加工に関連する遺構と推定される。

北側の調査区の遺構検出面は2.3mで比高差は1.5m近い。5月最終週に石基礎の礎を除去して、中世前半の層まで掘削を行い大博通側で道路状遺構の検出を見込んだ。

SX008とその周辺で無文銭が集中して出土した。銅製品の加工に関連する遺構とみられる。また石基礎SX001・004・023上面の時期は中世後半から16世紀代と推定された。

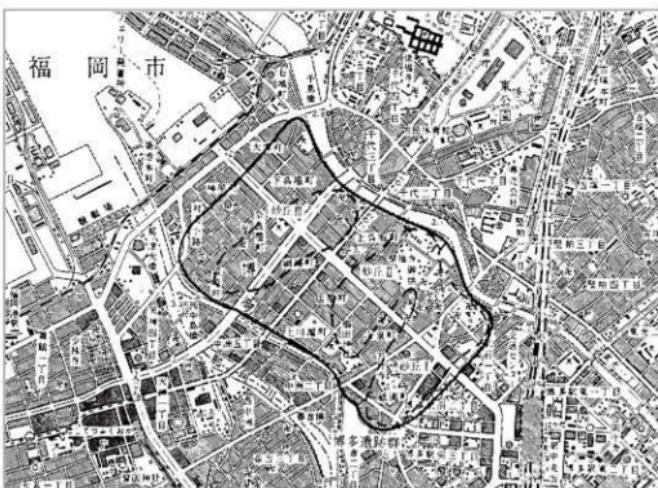


図1 博多遺跡群位置図 (1/25,000)



図2 博多遺跡群 229次調査地周辺 (1/2,000)

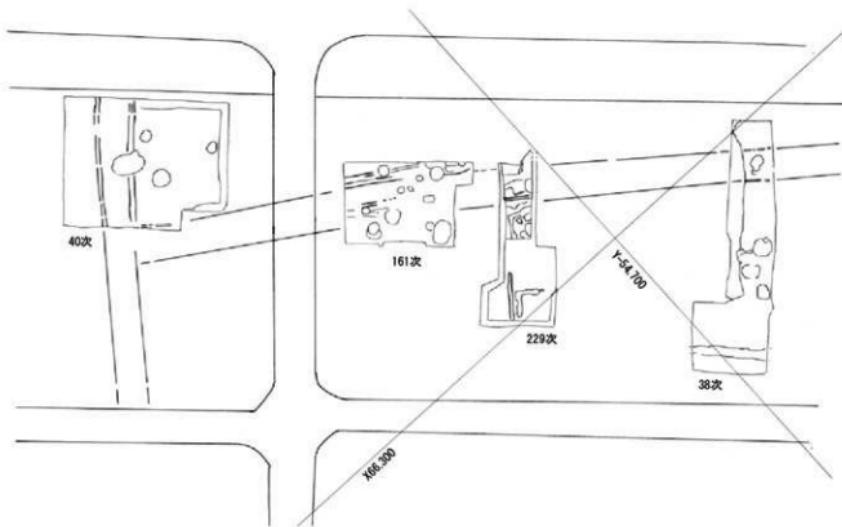


図3 博多遺跡群 229次調査地点 (1/800)

I 区の石基礎SX004の下層に併行して幅 0.4m 深さ 0.5m の溝 SD042 が検出された。埋土中に炭の細片を多く含んでおり、湿気を防ぐために掘削された溝とみられる。6月24日に完形の双層碗が出土した。

石基礎SX004は、6月最終週に石積の礫を除去し、下層を掘削する予定だったが礫の堆積が厚く遭構実測は7月までかかることになった。

大博通側のII区で幅5mあまりの道路状遺構SX046・SX053が検出された。道路面のレベルは3.5mから2.8mで、道路上層は隣接する161次調査のレベルより1mほど高い。堆積層は上層・中層・下層の三層に大別され、下層が最も硬く締まっている。道路状遺構の西側で側溝とみられるSD049が確認された。

銅造閏連遭機 SX008 の墳土の堆積から無文銭に混じって琉球銭、世高通宝が出土した。

6月末から道路状造構を掘削し標高2.2mで戸井田SE057を検出。SE057の西側で調査区を横断する溝SD059を検出、中国陶磁がまとまって出土した。

石基礎SX004の調査と並行して中世前半の包含層を掘削。7月中旬にI区西側を標高2.0mまで掘り下げ井戸などの遺構を検出。7月上旬の豪雨による土砂流入のため調査期間を19日から26日に1週間延期した。I区東側の掘削と遺構宝測を7月25日で終了し、翌日機材の撤収を行った。

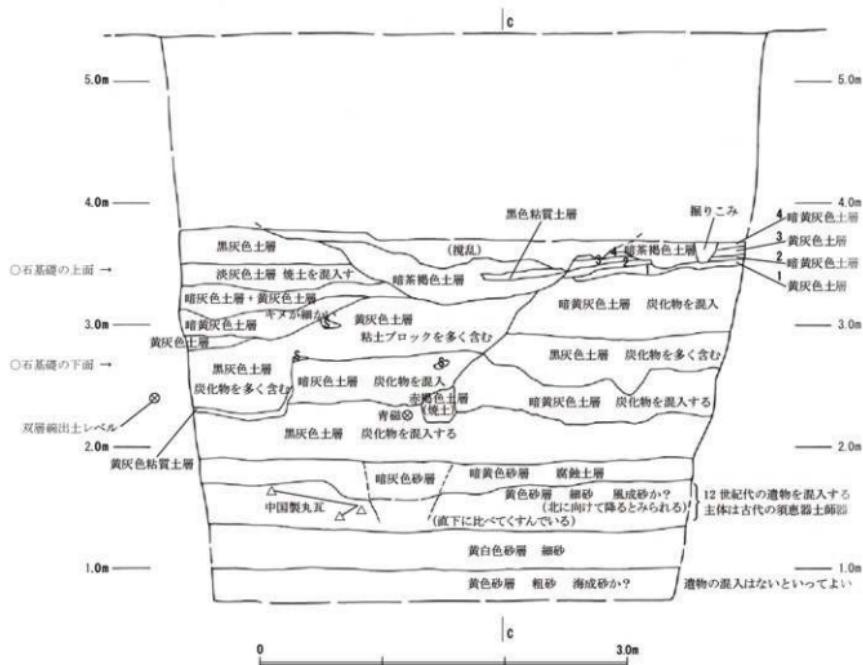


図4 229次調査I区北壁土層図(1/40)

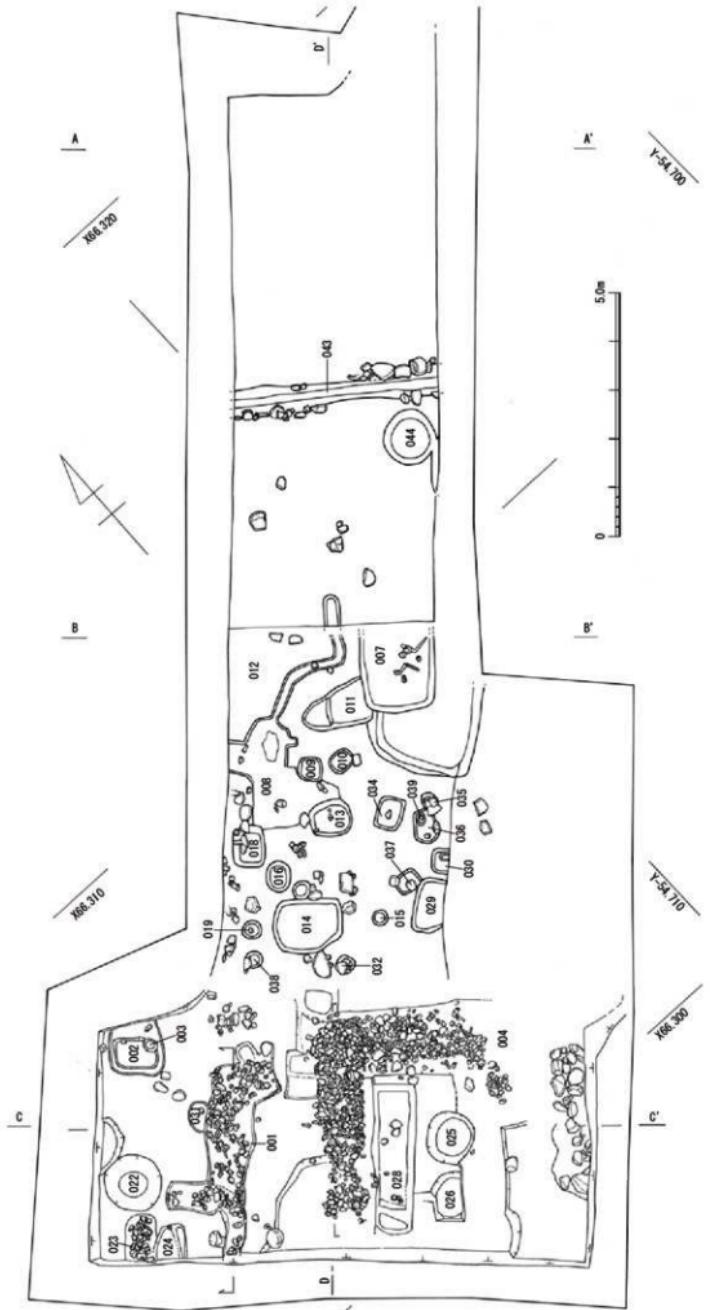


図5 博多遺跡群 229次調査第1面遺構配置図 (1/100)

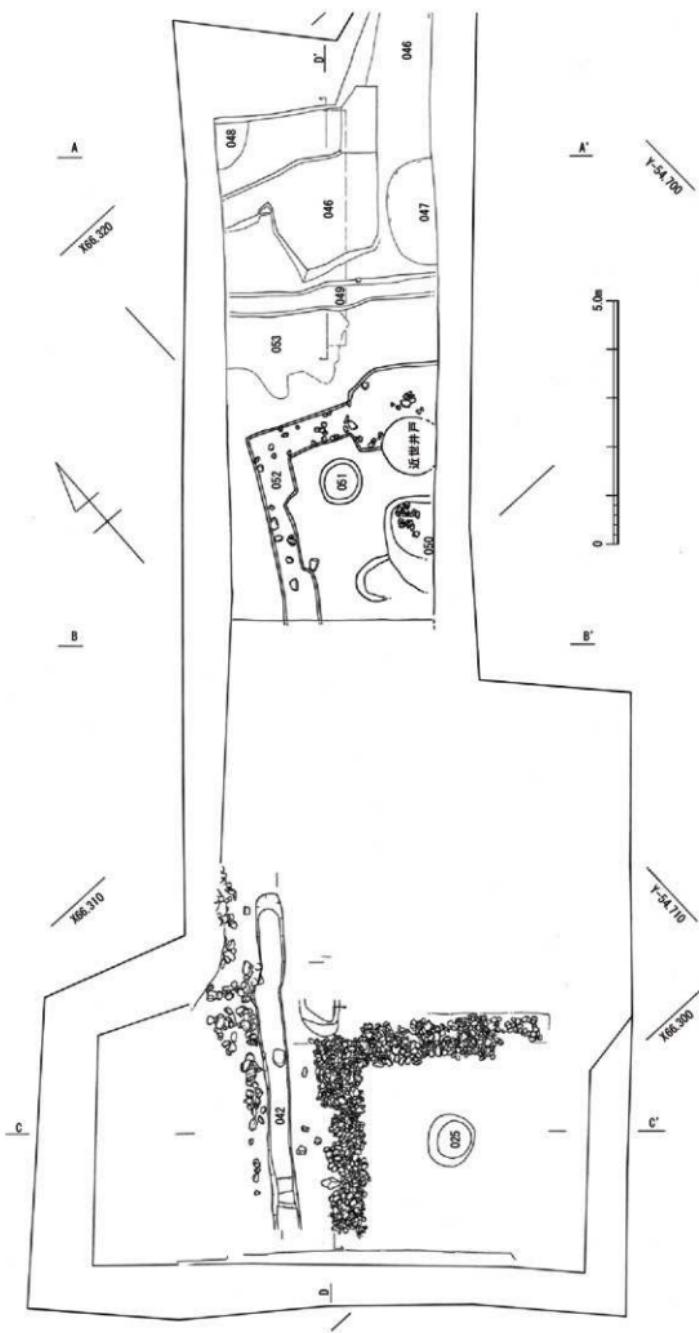


図6 博多遺跡群 229次調査第2面構造配置図 (1/100)

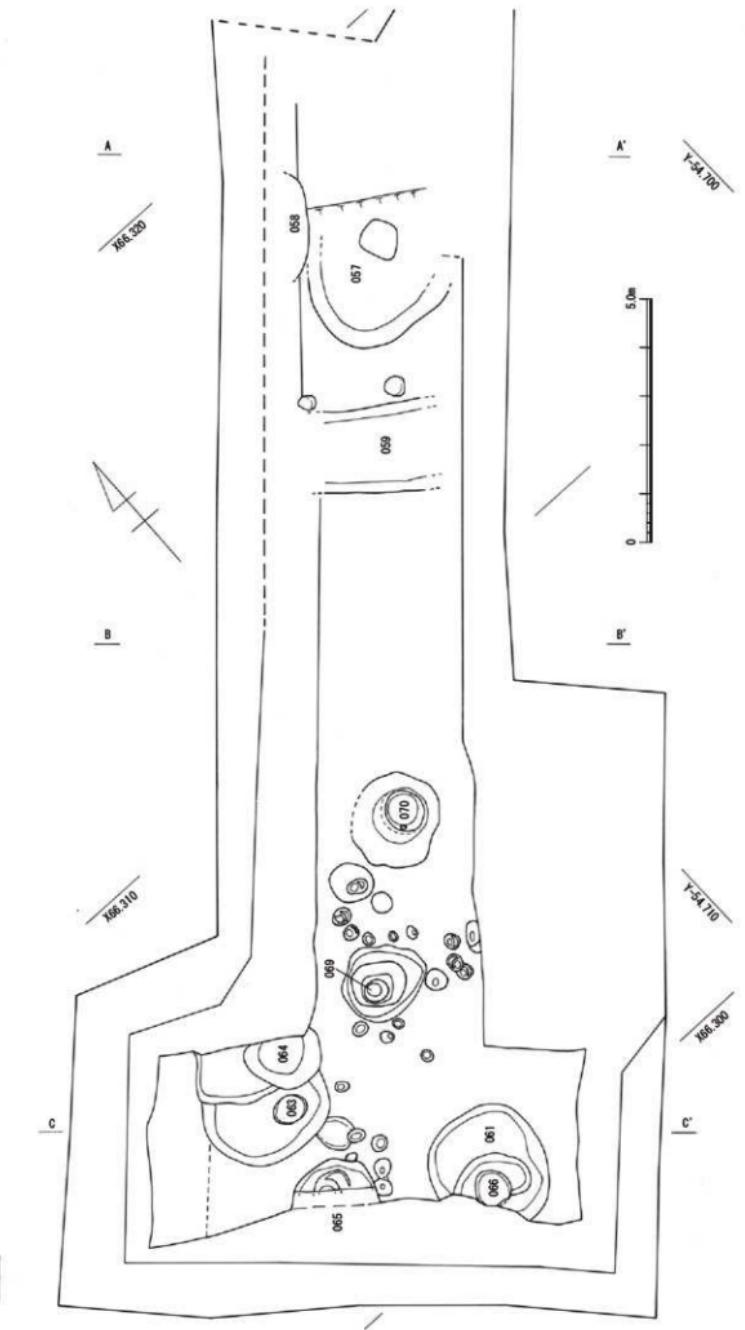


図7 博多遺跡群 229次調査第3面造構配置図 (1/100)

(1) 石基礎SX001・004・023、区画溝SD042(図8~12、巻頭図版1・図版3)

I区では地表下150cmの第1面で礫の分布が確認された。礫はII区中央に幅1m程で逆L字形に分布していることから石基礎の上面であることが分かった。石基礎は土蔵など耐火構造の建物の基礎とみられるが、建物の存続期間を推定するうえで石基礎の平面的な広がりと積足しの有無を判断する必要がある。

石基礎SX004は、礫上面で南北3.6m、東西4.1mで幅約1.1mの範囲であったが、標高2.9mになると石基礎の分布は南北4.7m幅約0.8mの範囲となった。礫上面の標高は3.4m、最下層は2.6mで厚い箇所で80cmの堆積が確認された。また標高2.9mで東西方向にのびる溝SD042が検出された。

以上から推定されるのは、第1期の石基礎SX004が標高2.6mから標高2.9mの約30cmの厚さで構築され、北側に沿って炭化物を入れた溝SD042が付随して掘削された。この段階で第1期の壁立ちの建物(土蔵)が構築された。

第1期の建物は中世後半に埋め立てが行われた。埋め立て整地の契機となったのは後述する道路状遺構にともなう嵩上などの影響と推定される。この段階で石基礎SX004上面に積石が行われ第2期の壁立ち建物と付属的な建物(SX001・023)が16世紀代まで存続したと考えられる。

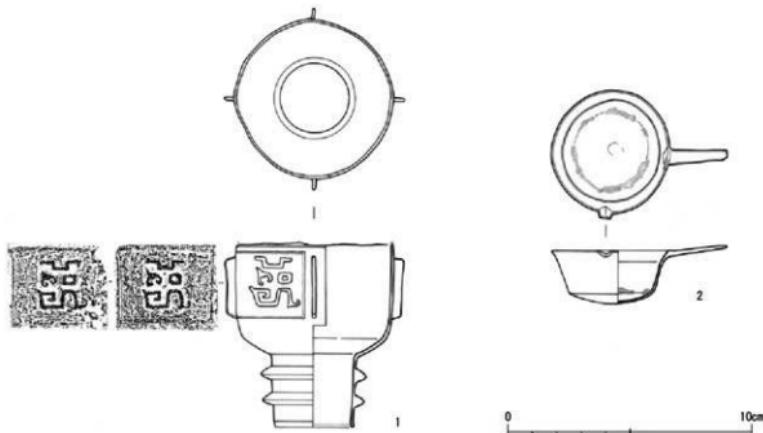


図8 石基礎SX001出土 倣古銅器・有柄片口銅器(1/2)

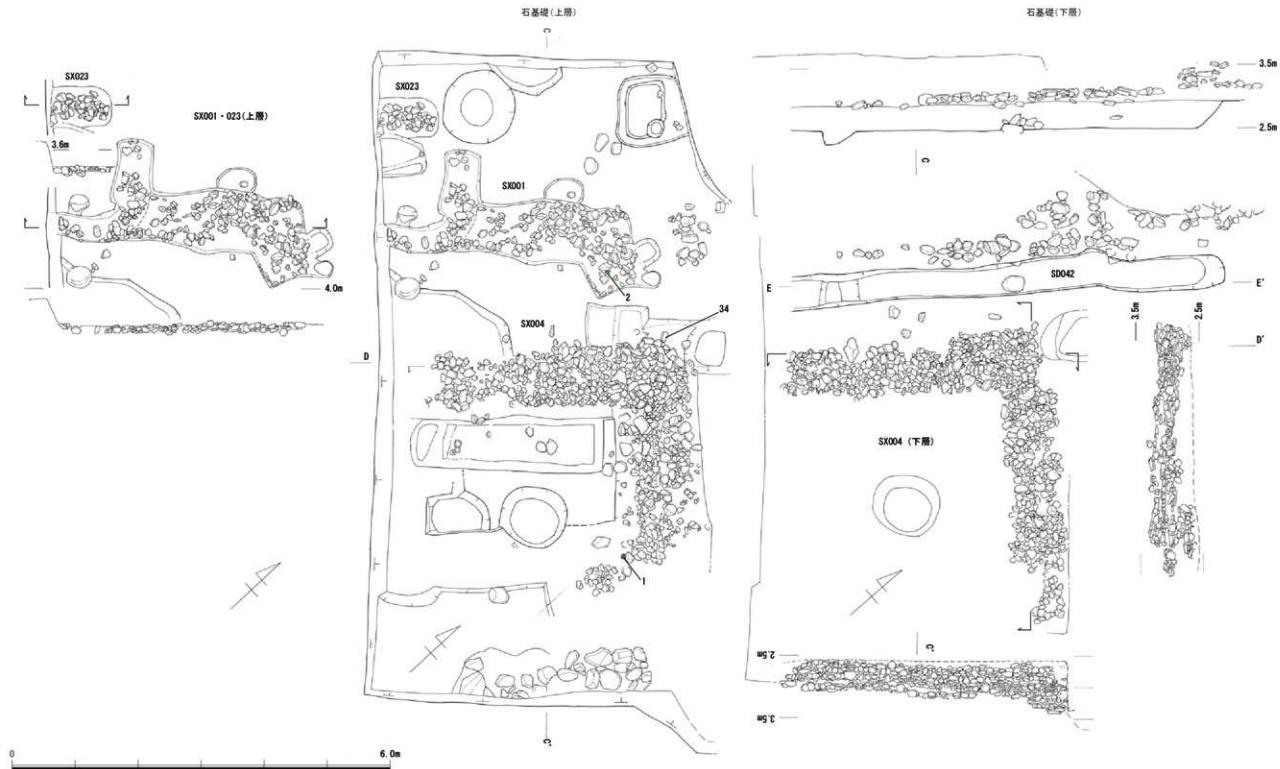


図9 石基礎 SX001・SX004・SX023、区画溝 SD042 造構実測図 (1/60)

SX004上層の礫に伴って金属器2点が出土した。1は倣古銅器で、上下端は後世に損壊をうけている。上部径6.5cmで現存高7.5cm、重量154.5gをはかる。4か所に縦方向の突起があり、下方に向かってすぼまり2条の隆起が廻っている。雷文の地文様に夔龍文のような主文様を配しており、中国古代青銅器を写した船形花瓶であったとみられる。中世後半に盛行した舶載の三具足のひとつで上部にはラッパ形の口、下部には裾広がりの足を付していたと推定される。三具足は花瓶、燭台、香炉などで構成されたものがある。

2は有柄の片口銅器である。全長7.2cmで、柄は2.4cm、重量18.0g、銅器は凸レンズ底で内面に褐色の付着物がみられる。

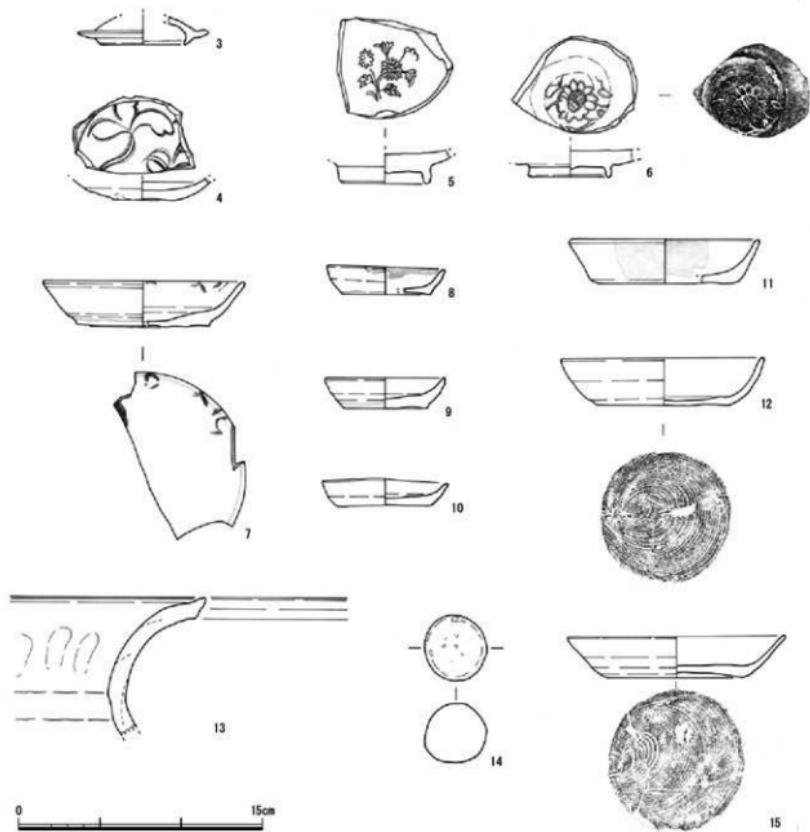


図10 石基礎SX001出土遺物実測図(1/3)

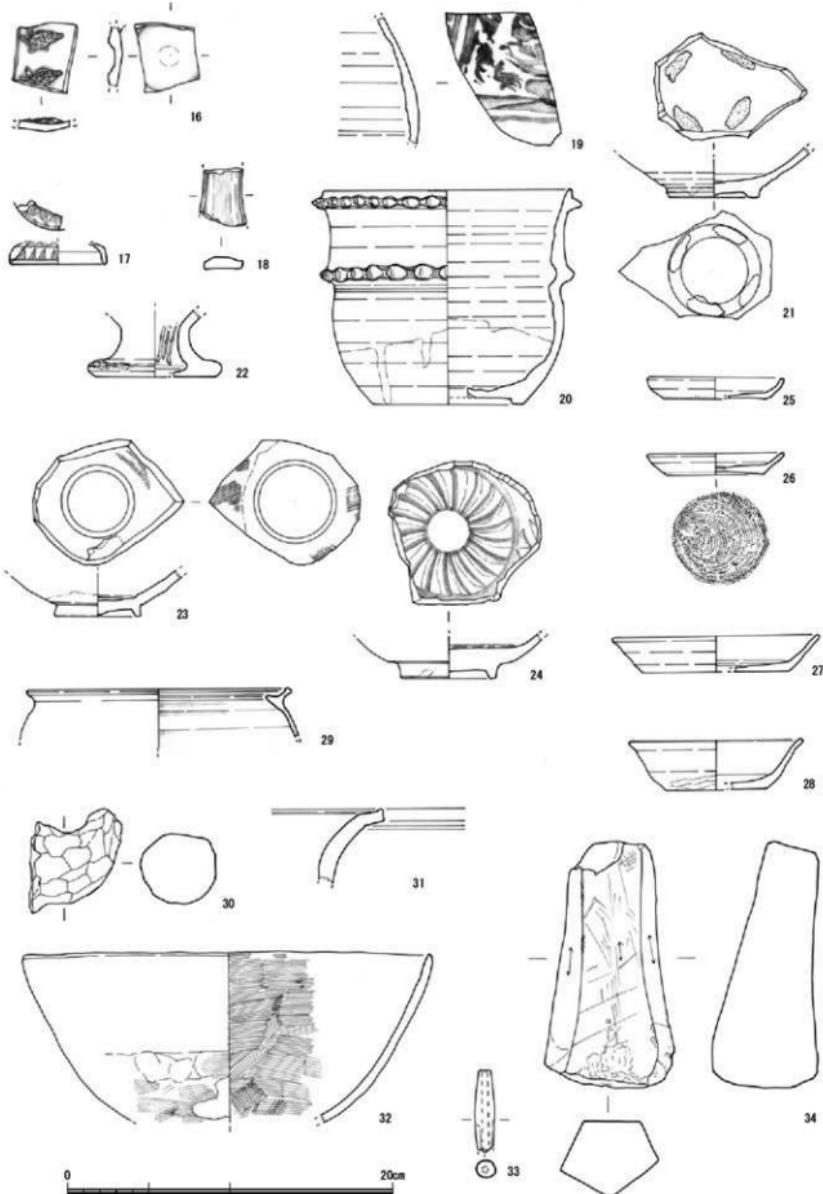


図 11 石基礎 SX004 出土遺物実測図 (1/3)

石基礎SX001(図10)

石基礎SX004の北側、第2期の壁立ち建物に付属する建物の基礎である。3は黒釉の蓋。4は龍泉窯の刻花文皿。5・6は明前期の青磁碗で、6は見込みに施釉はみられない。7は燈明皿として使用されたものか。14は遊具の石球で径は3.8cmである。

石基礎SX004下層(図11)

16は砧青磁盤で中央に双魚の貼花文がある。南宋後期～元。17は青白磁合子の蓋。19はスコタイ白釉鉄絵瓶。15世紀中頃。42次調査(245集)に類例がある。20は越州窯系(浙江省)の宋代の花盆で、12世紀代に比定される。口縁部と胴部に刻目突帯を廻らしている。21は底内外に目跡がある高麗青磁の碗、12世紀代。23は櫛描文青磁碗、II期。24は龍泉窯の刻花文碗、III期。33は土鍾。34は上面で検出された砥石である。

区画溝SD042(図12)

溝SD042は、標高2.9mで確認された。石基礎SX004下層、第1期の建物に伴う遺構で埋土に炭化物を多く含んでいることから湿気を防ぐ目的で掘られたとみられる。出土遺物は糸切り底の土師皿・壺が多くを占めている。

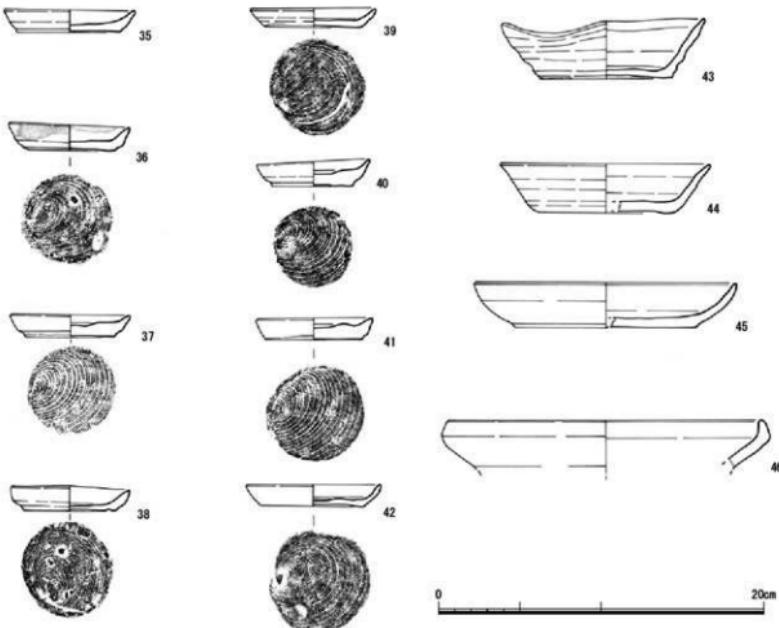


図12 区画溝 SD042 出土遺物実測図 (1/3)

(2) 鋳造関連遺構 SX008 (図13~17、図版2・図版4、表1)

I区東側の遺構掘削時に文字のない方孔円銭、無文銭が出土した。その分布域を精査したところ東西2.2mの範囲で焼土が確認された。焼土東端の70cm×45cmの範囲では楕円形プランの厚さ3cm～7cmの焼土堆積層があり、その東側に向かって伸びる屈曲する溝が確認された。溝の底の高さは3.31m～3.34mで検出面からの深さは10cm程度である。この焼土の上層からは無文銭27枚、有文銭7枚、複数の銅片、屈曲する溝の先端部で銅製の権が出土した。

焼土堆積層の南北には方形プランの土坑2基SK008N・Sが位置しており南側は深さ30cmで北側は深さ25cm、覆土には焼土塊と炭化物が多く含まれていた。

焼土の分布の下部では焼土ブロックや炭化物からなる堆積層が厚さ50cmにわたって観察された。周辺から出土した輪の羽口や手握ねの碗形取瓶などからSX008の主体部は炉で屈曲する溝は煙出しの役割をもつ遺構と判断された。銅の加工や鋳造に関連する施設と考えられる。

銅製品（図13）

47は瓜形の銅権。SX008の煙出しの溝SX005の東端で検出された。高さ2.7cm、胴部最大径2.3cm、底径1.8cmで重量は48gである。頂部の孔に断面方形の銅環を付している。48は全長2.9cmの扁平な銅片。櫻珞のような莊嚴具か。49は全長4.2cmの扁平な銅片。端部は意図的に曲げられている。50・51は銅製の針金の部分。47以外は、焼土堆積層付近で出土した。

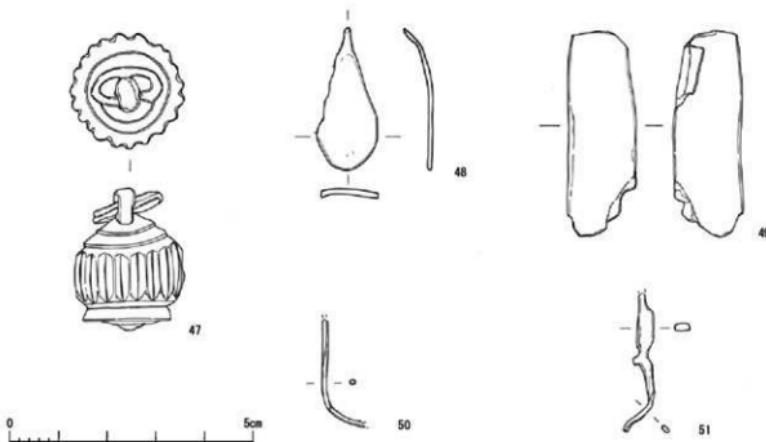


図13 鋳造関連遺構 SX008 出土銅製品実測図 (1/1)

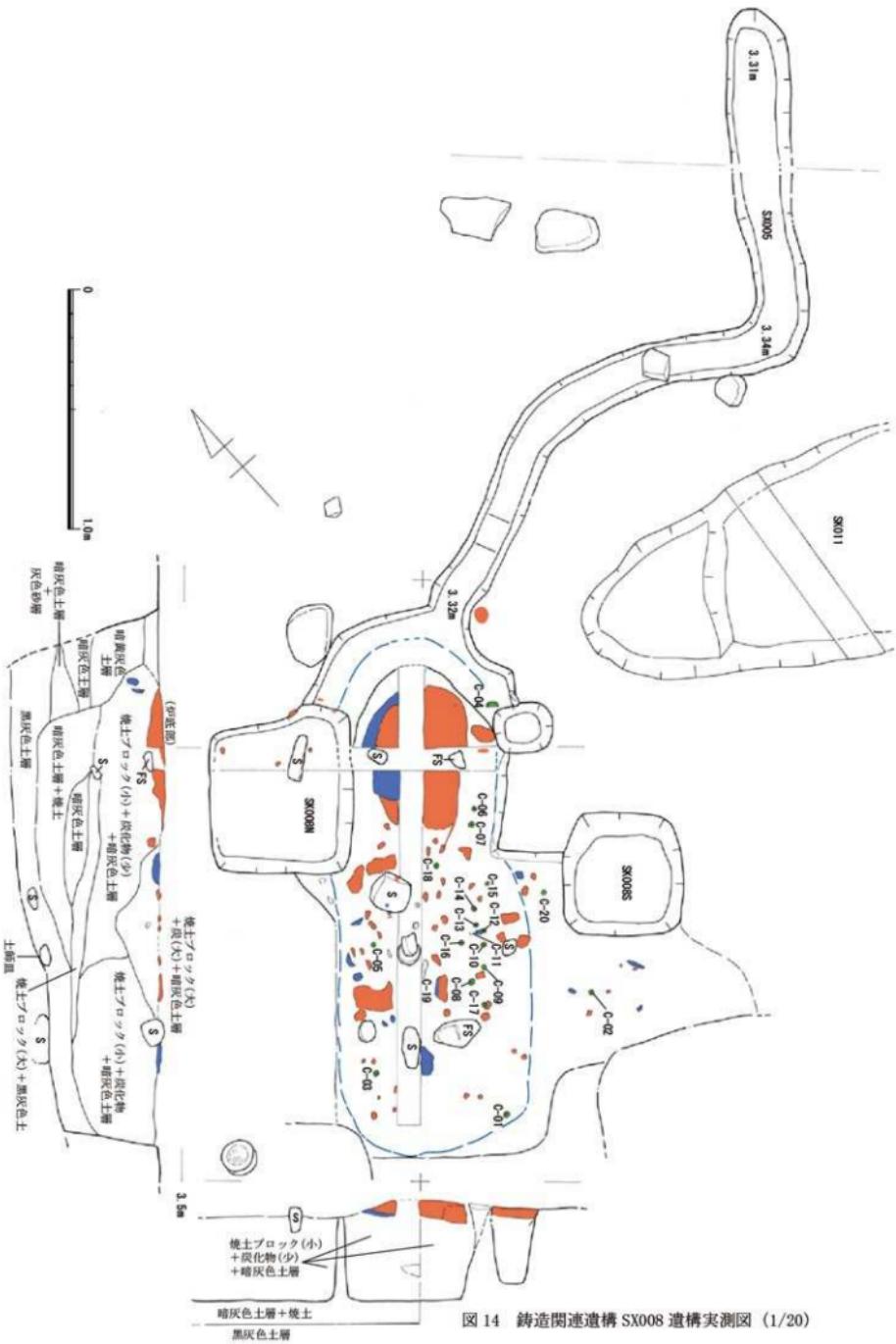


図 14 鋳造関連構造 SX008 遺構実測図 (1/20)

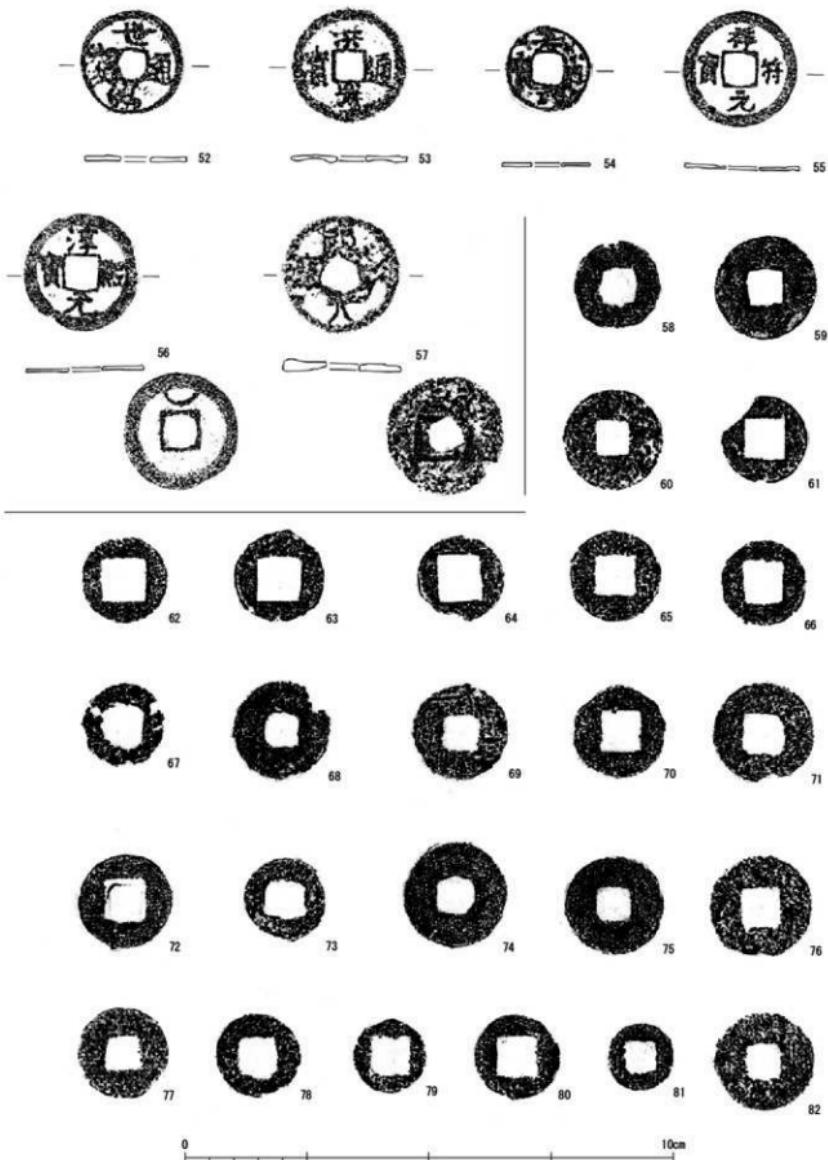


図 15 鋳造間連造構出土銅錢実測図 (1/1)

表1 博多遺跡群 229次調査出土銅錢一覧

国 名	番号	出土遺構	銭文	備考	法華		寶光エックツ総分析結果									寶光エックス線分析結果②		
					直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	Si	Se	Sb	Fe	Cu	As	Pb	Sn	Cu	Pb	
59	1	I区008	一=1 無文銭		21.25	0.5	1.1	9.28	0.19	5.50	1.23	79.38	0.45	3.97	0.66	92.67	6.68	
59	2	I区008	一=2 法武通宝		24.0	1.6	2.2	3.56	2.58	0.77	26.82	2.16	69.81	2.6	20.84	26.56		
60	3	I区008	一=3 無文銭		20.65	0.75	1.2	26.31	0.12	8.66	19.25	44.26	0.21	0.98	1.79	93.06	5.15	
61	4	I区008	一=5 無文銭	一部欠	17.9	0.6	4.32	3.97	3.91	1.35	40.79	2.73	43.04	4.5	42.13	53.37		
62	5	I区008	一=6 無文銭		18.15	0.5	0.4	4.27	3.54	4.23	3.42	96.50	2.83	25.92	4.18	60.08	35.77	
63	6	I区008	一=7 無文銭		18.3	0.7	0.5	37.19	0.35	8.84	10.09	37.63	0.85	5.61	2.05	78.31	19.65	
64	7	I区008	一=8 無文銭	一部欠	18.0	0.5	0.4	2.15	1.37	1.03	2.50	57.14	3.87	32.27	1.44	96.42	42.16	
65	8	I区008	一=9 無文銭		18.9	0.4	4.1	9.69	0.19	8.89	0.94	74.67	0.84	12.09	0.34	83.72	15.94	
66	9	I区008 條上土坑	一=6 律元家		24.5	0.9	2.4	7.49	0.35	6.24	2.78	5.96	3.07	74.11	0.84	6.34	92.81	
67	10	I区008 條上土坑	一=7 法武通宝		22.1	0.8	2.2	10.19	0.12	1.34	8.57	58.32	1.84	19.62	0.28	68.65	31.68	
68	11	I区008	一=8 無文銭	小片2														
69	12	I区008	一=9 無文銭		17.8	0.45	6.6	3.76	0.10	5.69	6.90	25.29	2.79	56.06	0.51	26.96	72.53	
67	13	I区008	一=9 無文銭		17.1	0.85	1.2	15.17	0.09	5.94	2.12	1.79	2.89	72.08	0.32	2.95	97.63	
68	14	I区008	一=9 無文銭	一部欠	19.9	0.6	1.0	1.07	0.11	0.63	0.88	95.33	0.15	1.35	0.15	98.12	1.72	
15	15	I区008	一=10 和通宝		29.2	0.9	1.3	6.04	0.06	1.99	4.10	80.42	0.82	6.72	0.19	89.11	10.7	
16	16	I区008	一=11 無文銭	小片4														
69	17	I区008	一=12 無文銭		20.0	0.55	0.9	16.70	0.09	0.10	7.66	66.99	0.38	2.17	0.53	93.77	5.71	
54	18	I区008	一=13 法武通宝(鶴)		18.1	0.5	0.8	7.81	1.87	6.39	4.73	12.79	2.97	63.45	2.7	13.95	83.35	
19	19	I区008	一=14 無文銭	小片3														
70	20	I区008	一=15 無文銭		18.8	0.5	0.5	7.25	8.08	1.79	1.79	73.87	0.78	6.44	8.97	81.2	9.83	
52	21	I区008	一=16 長高通宝		21.6	0.9	2.5	12.46	4.66	6.59	5.06	32.09	2.03	37.16	6.54	38.21	55.26	
71	22	I区008	一=17 無文銭	一部欠	20.8	0.65	1.2	4.14	9.61	2.27	3.73	58.19	2.66	18.41	10.91	61.67	27.42	
72	23	I区008	一=18 無文銭		19.65	0.8	4.1	22.97	0.11	8.89	35.31	33.94	0.41	2.80	1.86	81.45	16.69	
73	24	I区008	一=19 無文銭		17.6	0.7	1.0	13.79	0.06	6.52	3.70	2.79	3.09	70.11	0.27	3.18	98.55	
56	25	I区008	一=20 楊元家	背「月」	24.2	0.9	2.4	4.16	7.73	7.62	9.22	13.22	2.42	55.63	10.58	14.65	74.77	
26	26	I区008 條上内	無文銭	二折	20.45	0.6	4.22	0.25	0.30	0.97	92.74	0.16	0.74	0.32	98.46	1.22		
74	27	I区008 條上内	無文銭		21.75	0.9	1.9	6.83	0.06	1.13	0.65	85.47	0.92	4.93	0.14	91.74	8.12	
76	28	I区008 條上内	無文銭		20.1	0.5	1.2	1.67	5.79	1.58	1.83	80.62	0.94	7.56	2.6	83.09	10.65	
76	29	I区008 條上内	無文銭		21.1	1.1	1.2	2.00	0.10	0.16	0.98	1.03	86.11	0.14	2.03	0.15	97.02	2.84
77	30	I区008 條上内	無文銭		19.0	0.55	0.8	3.05	4.67	0.94	0.99	70.95	1.11	18.29	4.9	72.97	22.14	
78	31	I区008 條上内	無文銭		17.4	0.7	0.9	24.70	0.74	5.37	3.23	8.61	1.75	55.61	1.48	11.41	87.11	
32	32	I区008 條上西	無文銭	二折	16.7	0.75	0.5											
79	33	I区008 條上西	無文銭		15.6	0.55	0.3	2.19	6.67	1.93	2.26	73.08	1.57	12.29	7.33	75.27	17.4	
34	34	I区008 下層	(解説不確)	半折														
56	35	I区008	一=19 無文銭		18.5	0.5	0.7	1.37	1.89	0.75	1.17	68.11	1.98	24.74	1.97	68.89	29.94	
57	36	001	(解説不確)	天欠口1室、1/3片	24.6	1.05	3.1	58.99	0.33	4.55	2.66	13.26	1.04	19.17	1.4	32.21	66.39	
37	37	001	(解説不確)	小片3														
38	38	001 土坑	(解説不確)	小片2														
80	40	011 土坑	無文銭		17.9	0.4	0.6	2.45	5.02	0.78	0.99	86.54	0.47	3.74	5.24	89.51	5.25	
41	41	011 土坑	法武通宝(鶴) 小片1、「武」のみ造出															
81	42	011 土坑	無文銭		14.1	0.5	0.58	16.54	0.47	0.67	2.24	10.31	2.66	63.71	0.86	11.96	87.19	
82	43	011 土坑	無文銭		20.75	0.5	1.1	3.4	2.34	0.09	0.96	5.77	26.62	0.16	0.16	0.25	98.81	0.84
44	44	I区009 長盛通	天聖元宝		25.3	1.1	1.6	3.6	4.19	23.84	9.72	2.95	14.53	1.43	43.32	29.96	16.91	54.93
45	45	I区053 長盛通	太平通宝	1/2折	25.1	0.95		2.97	42.00	7.22	4.84	22.24	1.07	19.65	40.86	24.35	25.79	
46	46	I区053 長盛通	日昇元宝		25.3	1.2	3.8	4.17	0.09	2.33	0.63	3.44	2.92	87.51	0.2	4.2	97.38	
47	47	002 土坑	崇慶元宝		23.6	1.25	3.3	22.11	1.12	9.76	5.15	23.09	1.14	37.36	2.74	32.39	64.87	
48	48	005	宋寧通宝	一折、一部欠	25.65	1.0		4.89	5.42	5.39	0.35	7.77	1.91	74.27	6.13	8.1	85.76	
49	49	012	永樂通宝(鶴)		24.7	1.1	3.7	28.90	1.09	6.66	5.50	58.09	0.64	5.80	2.1	96.96	3.35	
50	50	42 売	(解説不確)	破片1														
51	51	I区050 併化通	元慶通宝		26.2	1.05	2.8	3.21	18.25	4.74	1.40	15.46	1.83	55.11	19.82	15.98	64.20	
52	52	I区050 併化通	無文銭		23.55	1.15	1.8	23.90	0.78	6.86	8.83	55.38	0.26	3.99	2.04	87.99	9.97	
53	53	I区051 土坑	撫寧元宝		24.0	0.85	2.3	3.90	14.23	6.70	4.24	6.86	2.44	61.63	16.71	7.24	76.05	
54	54	I区1~2 3面横出面	(解説不確)	破多い	25.3													
55	55	I区1~2 3面横出面	太平通宝		24.4	1.2	3.1	5.38	15.63	4.23	2.09	20.65	2.52	49.50	17.3	21.62	61.07	
56	56	I区1~2~3 3面横出面 (中空)	(解説不確)	半折														
57	57	I区2~3 3面横出面	永慶通宝		25.5	1.8	2.5	4.99	18.57	4.20	1.92	28.89	1.62	29.80	20.71	30.71	48.58	
58	58	I区3~4~5 3面横出面	崇寧通宝		2.51	1.2	2.7	3.57	12.27	2.21	1.15	18.44	1.57	60.79	12.87	18.91	68.22	
59	59	I区4横出面	(解説不確)															
60	60	I区4横出面	大型銭、手折		25.3	0.12	2.68	6.14	2.29	0.65	31.06	1.90	51.77	6.59	32.51	69.92		
61	61	I区1~2 2面横出面 (解説不確)	吉昌1室、1/3欠		25.6	1.3												
62	62	I区2~3~3 3面横出面	咸平元宝	67と錯着	25.8	1.4												
63	63	I区2~3~3 3面横出面	(解説不確)	66と錯着	27.0	1.5												
64	64	I区2~3~3 3面横出面	嘉祐元宝		23.7	1.65	3.9	4.74	0.09	11.34	4.33	19.31	2.84	57.45	0.89	21.26	77.85	
65	65	I区4~5 3面横出面	政和通宝	輪の一部欠	25.2	1.1	2.8	7.42	3.55	3.95	8.03	5.87	2.69	68.50	4.6	6.42	88.98	
66	66	I区4横出面	元祐通宝		24.7	1.1	3.3	4.93	19.38	4.86	3.07	5.61	2.09	60.14	21.81	5.92	72.27	
67	67	I区4横出面	永祐通宝		22.9	0.95	2.4											
68	68	I区4横出面	(解説不確)	全体に縛	24.6	1.35	3.5											
69	69	I区4横出面	永永通宝	全体に縛	25.0	1.31	2.5											
70	70	I区4横出面	(解説不確)	全体に縛、一部欠	26.6	0.9												
71	71	I区4横出面	(解説不確)	縛片2														
73	73	I区094 石槽	(解説不確)		24.05	1.6	3.7											
74	74	I区094 石槽下端	(解説不確)		24.2	1.6	3.7											
75	75	I区4横出面	無文銭		21.4	0.7	1.8	6.92	0.06	1.32	1.48	76.76	0.56	12.89	0.16	83.54	16.29	
76	76	I区試標	(解説不確)															

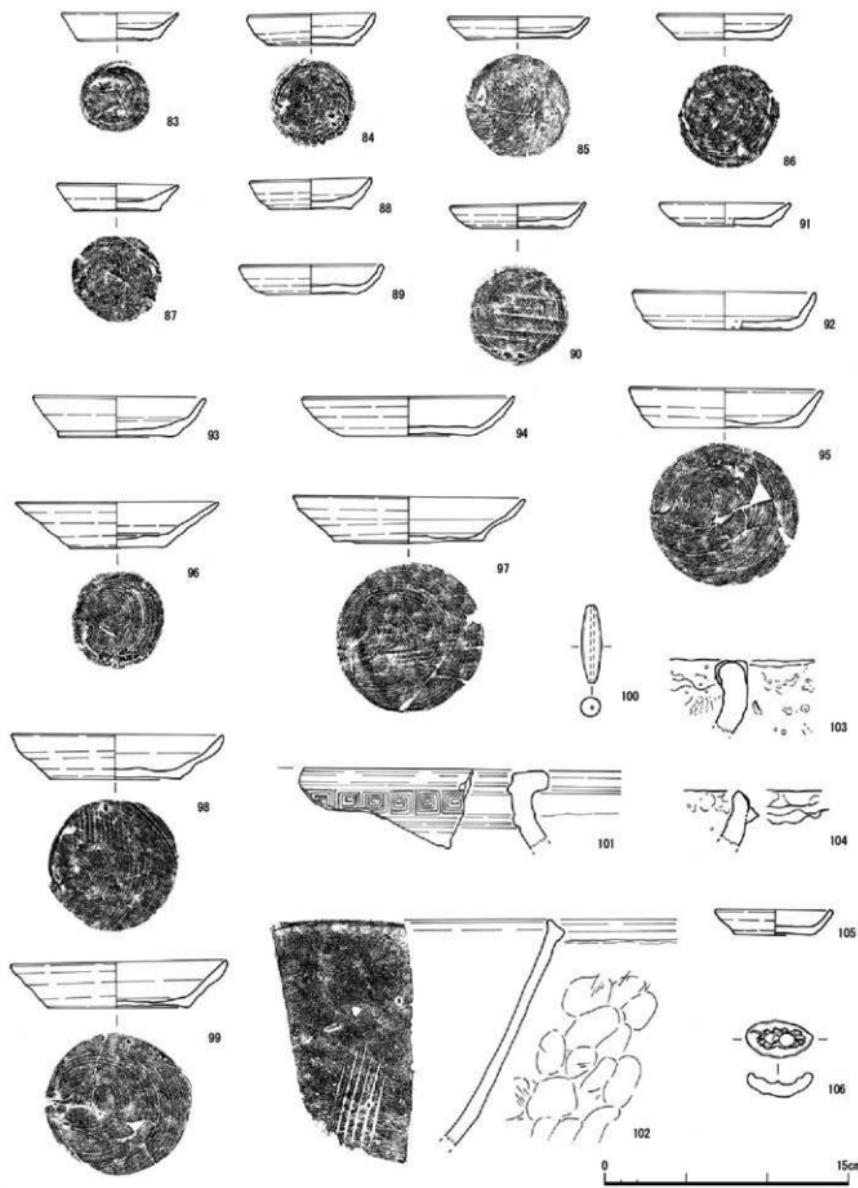


図 16 鋳造関連遺構出土遺物実測図 1 (1/3)

銅錢（図15・表1）

銅錢は南接する不整形土坑SX011でも8枚が出土した。出土状況を確認できたものは遺構上面の標高3.3m前後に集中していた。

世高通寶52は、大世通宝に次いで鋳造された琉球銭で、尚徳王の1461～1469年にかけて鋳造された。径2.1～2.17cm。明の永楽通寶『永楽』の文字に『世高』の文字を嵌め込む鏤置といわれる手法が採られている。洪武通寶は2枚、明の1368年鋳造。54は周郭が削り取られている。祥符元寶55は1008年初鋳の北宋銭。径2.36～2.4cm。淳熙元寶56は南宋1174年鋳造で、背面上に「月」が鋳出されている。径2.42～2.44cm。開元通宝は土坑SX011にともなって出土した。径2.45～2.46cm。

無文銭58～82は、すべて広穿の薄小銭で両面とも縁と郭のないタイプで占められている。直径14mm代から22mm代まで、重量は0.3gから2.2gの範囲におさまる。

鋳造関連遺物 埋堀・取瓶・輪羽口・鋳型（図16・17）

出土土器は糸切りの土師皿と壺、土錐100、口縁下に雷文の印文がある瓦質土器101である。焼土坑SX008で検出された被熱した土製品は103・104の2点、その他はI・II区の遺構検出に伴って出土した。不整形土坑SX011に伴う土製品106は、草花を表した目貫など刀装具の鋳型か。埋堀・取瓶は107～111。109は内底にガラス質の付着物が認められる。他も被熱が著しい。輪の羽口112・113は遺構面の掘り下げに伴って検出された。

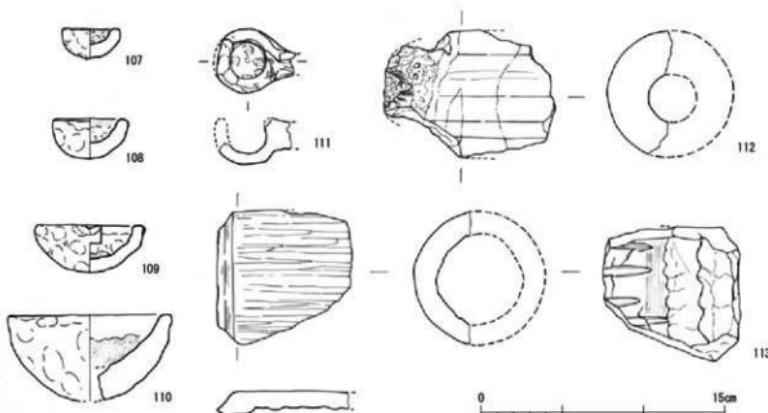


図17 鋳造関連遺構出土遺物実測図2 (1/3)

(3) 道路状遺構SX046・SD049・SX053(図3・18~23、図版5)

229次調査区周辺では北側の40次調査や隣接する161次調査、南側の38次調査で道路状遺構や側溝が検出されており、今回も調査区の東側で道路状遺構の検出が予想されていた。東側調査区第2面で砂質土や粘質土が相互に堆積した硬化層SX046が確認された。硬化層の堆積は、標高2.5m~3.4mにわたる1.0m近くの厚さであった。

当初SD049を西側の側溝とみて、並行する東側側溝の検出を試みた。東側に緩やかな傾斜は認められたが対応する側溝は確認できなかった。南接する243次調査の担当者から道路面はSD049より西に広がる状況を指摘され、暗黃灰色土層の三和土状の硬化面SX053を道路状遺構の一部に含める妥当性が認められた。SD049は方向性から道路状遺構に関連する遺構と推定される。

SX046出土遺物(図20・21)

118は刻花蓮弁文の青磁碗、13世紀第1~第3四半期。120は高麗末~朝鮮王朝にかけての象嵌青磁の碗、中層出土。128は龍泉青磁の大型碗。134は福建産白磁碗、底部に墨書がみられる。135は基盤層で検出されたⅠ期の広東産白磁皿。136は広東産のⅠ期の白磁皿で底部に墨書「上」がある。137は基盤層出土の広東産のⅠ期の白磁皿。138は福建産のⅡ期の白磁皿で刻花文がある。139は基盤層で出土した青白磁の小壺、12世紀代の景德鎮産。140は合子の身。141は基盤層出土の楕円鉢で13世紀前半。142は福建産のⅢ期の白磁碗。150は下層ベルトで検出された古手の櫛描文系青磁碗、12世紀第3四半期。151は福建産白磁碗、12世紀中頃から13世紀。

SD049出土遺物(図22)

157は楕円鉢の有耳瓶。158は口禿の白磁皿。福建省北部か浙江省南部か、13世紀末から14世紀前半。160は近世陶磁の混入品か。159は溝SD049の下層出土の龍泉窯の鍋蓮弁文碗、13世紀代。162は下層出土の黄瀬戸のおろし皿、14世紀。

SX053出土遺物(図23)

169~171は基盤層出土の墨書陶器。169の白磁碗は外底の削りは浅い。170は龍泉窯青磁碗。171は輪状釉剥ぎの白磁碗で外底は「十」の墨書か。173は基盤層出土の龍泉窯Ⅲ期の青磁皿。174は基盤層出土の福建産Ⅱ期の白磁碗。175は基盤層出土の蓮弁文の青磁碗。176は、瓦器碗。177は福建産Ⅲ期の白磁水注または壺。178は基盤層出土の楕円鉢で薄手で精緻なつくりである。洪塘窯(福建省)13世紀後半~14世紀初頭。

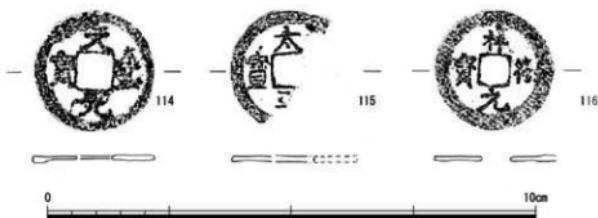


図18 道路状遺構出土銅錢実測図(1/1)

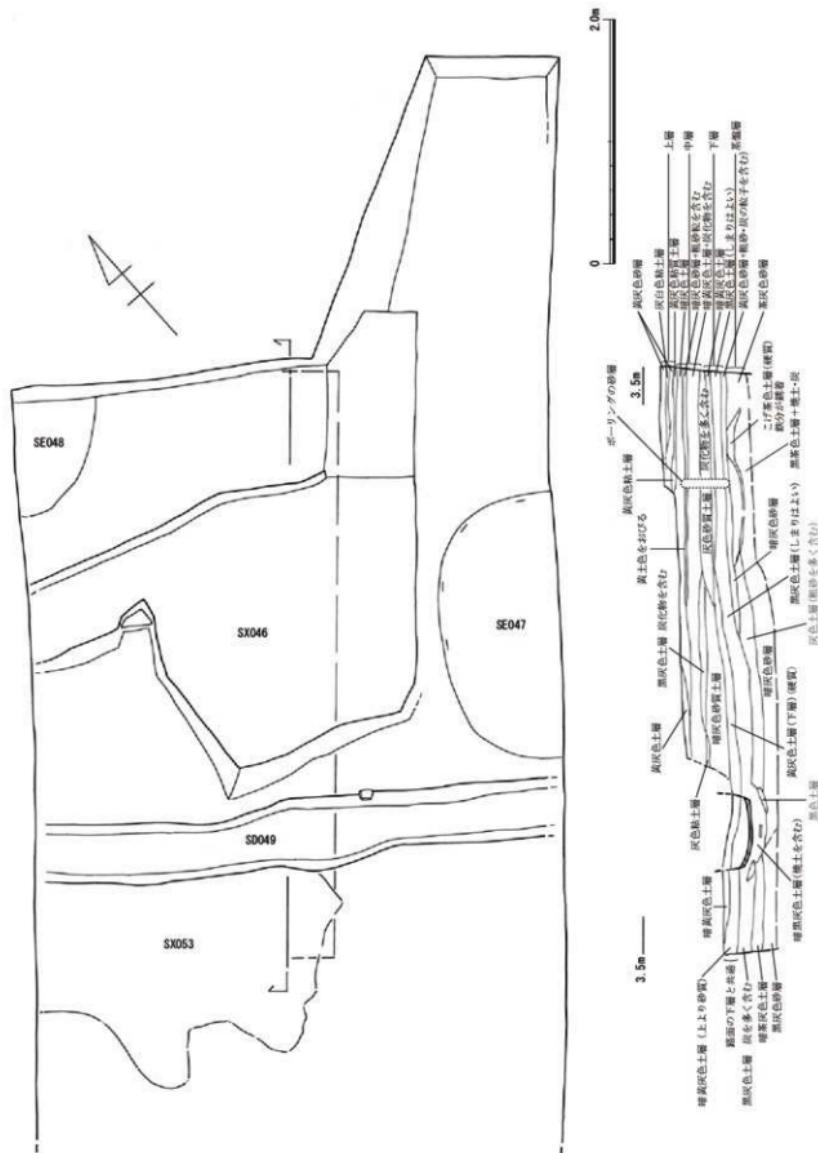


図 19 道路状遺構 SX046・053、SD049 遺構実測図 1 (1/40)

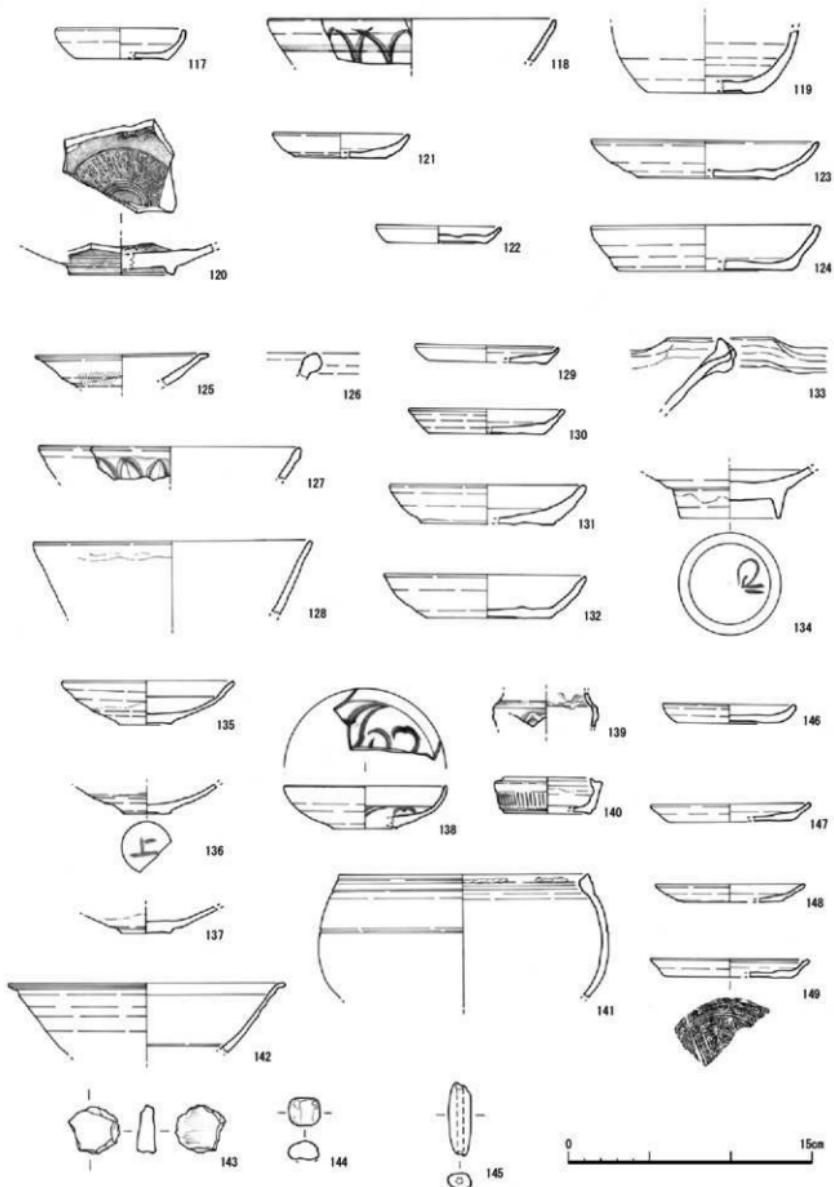


図20 道路状造構 SX046 出土遺物実測図1 (1/3)

道路状遺構出土の銅鏡（図18）

天聖元寶114 SX046 基盤層。径2.55cm。北宋1038年。太平通寶115 SX053出土。径2.5cm。北宋976年。祥符元寶116 SX053基盤層出土。北宋1008年。

道路状遺構は、SX046中層の象嵌青磁の時期から14世紀末、基盤層では12世紀代の中国陶磁が出土している。以上から道路として機能したのは、15世紀を前後する13世紀後半から16世紀代にかけての時期と推定される。

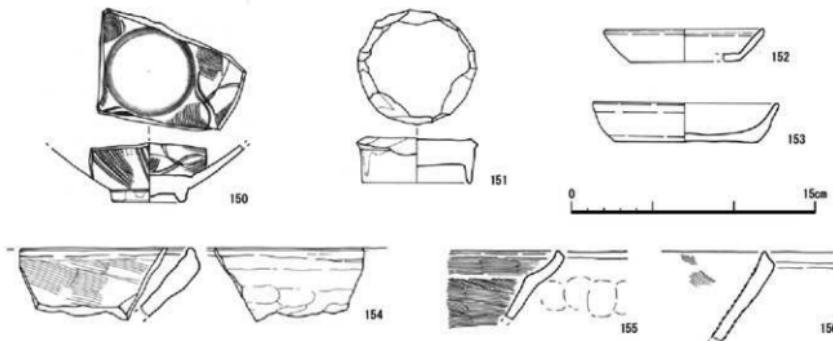


図21 道路状遺構 SX046 出土遺物実測図 2 (1/3)

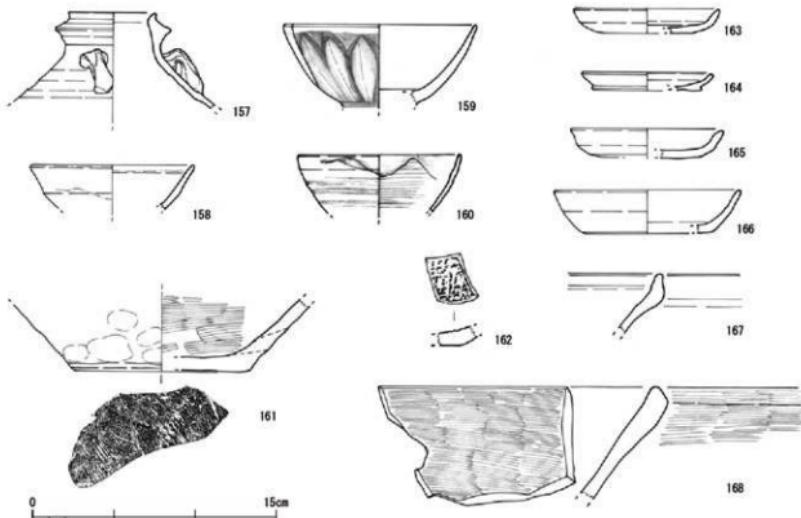


図22 道路状遺構 SD049 出土遺物実測図 (1/3)

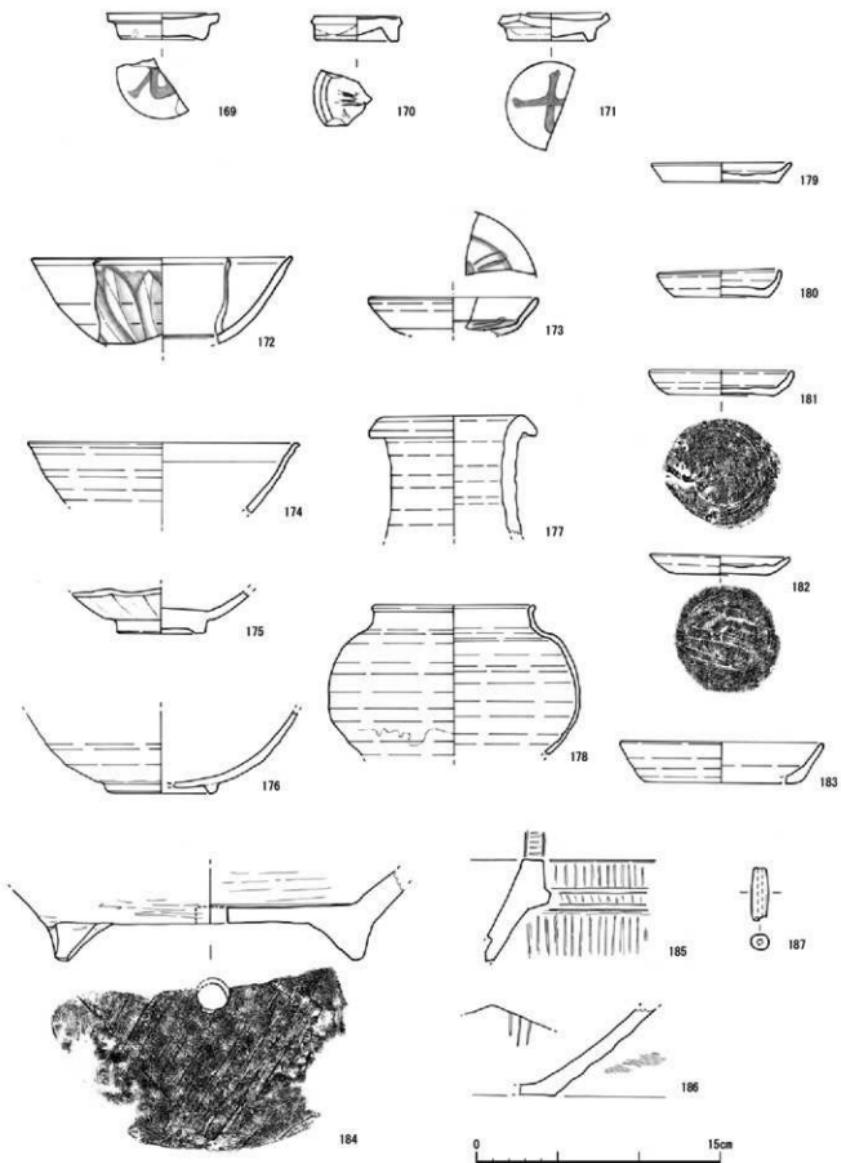


図 23 道路状遺構 SX053 出土遺物実測図 (1/3)

(4) 溝状遺構 SD059 (図 7・24~27、図版 6 中)

SD059はII区第3面で検出された全長2.3m、幅1.7m、深さ0.3mの溝である。道路状遺構調査後の掘削時に黄色砂層に掘りこまれた溝が確認された。溝の延長部は隣接する161次や243次調査では不明である。限られた調査範囲だったが中国産陶磁器を主体とする、まとまった数量の遺物が出土した。

188は福建産のII期の白磁碗。189は広東産のI期の白磁碗。190はI期の越州窯系青磁碗で台州黄岩窯(浙江省)産。外底に目痕が残る。博多167次調査(994集)に類例があるが出土例は希少。191は内面に放射状の白堆線がある白磁皿、11世紀後半~12世紀前半。192は同安窯系青磁碗、12世紀後半。193は青白磁の碗、12世紀。194はI期の白磁碗、底部に花押の墨書がみられる。195は瓦器碗の底部。197・198はI期の白磁碗、同一個体か。199は、櫛描文系青磁皿。200は初期高麗青磁の碗で内外底に明瞭な目痕が残る、11世紀後半~12世紀前半。201は12世紀中頃から後半の輪状釉剥ぎの白磁皿、底部に板目がみられる。202は12世紀代の青磁小壺。203は青白磁の四花形合子、12世紀、景德鎮。204は磁竈窯(福建省)の黄釉盤で底部に墨書が認められる。11世紀後半~12世紀。

206は糸切り底の皿。208は糸切り底の皿、底部に板目がみられる。207・209はヘラ切り底の皿で底部に板目がみられる。210は糸切り底の壺。211・212の壺は押し出し技法によるもの、底部には板目がみられる。

213は国産の瓦質土器。214は江蘇省産の褐釉大型壺。215は褐釉陶器の大型四耳壺。216~219は国産の大型甕。225~228は布目压痕と格子叩き痕がのこる平安時代の瓦片である。

溝SD059には11世紀から12世紀代の遺物がまとめて廃棄されており、中国陶磁の白磁、青磁、青白磁、黄釉・褐釉陶器から国産の瓦質土器まで多岐にわたっている。

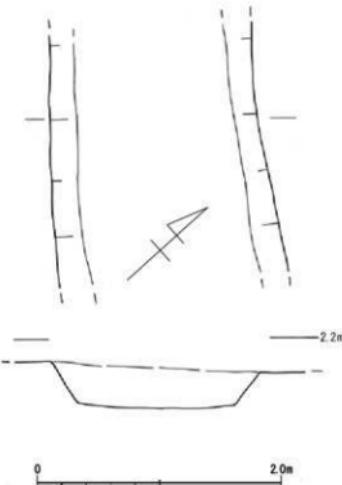


図 24 溝状遺構 SD059 遺構実測図 (1/40)

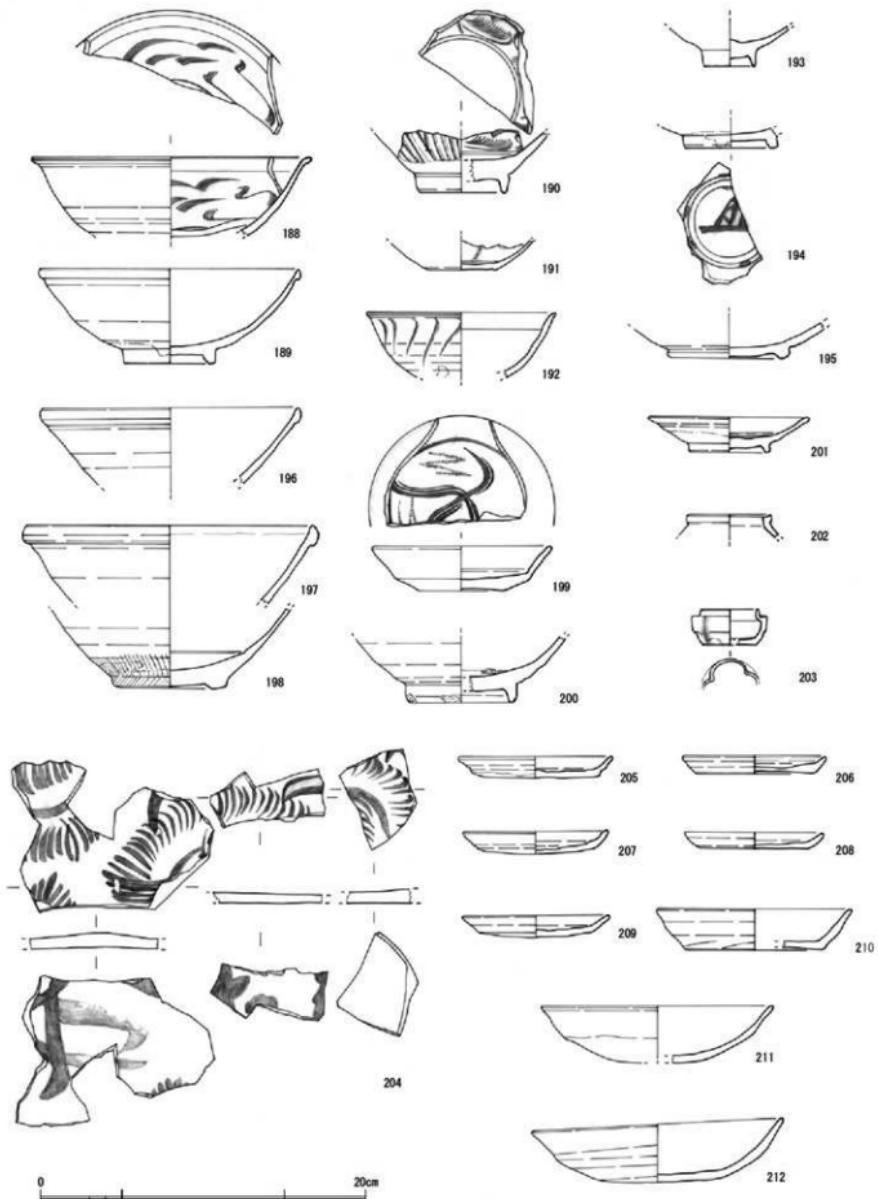


図25 溝状遺構 SD059 出土遺物実測図1 (1/3)

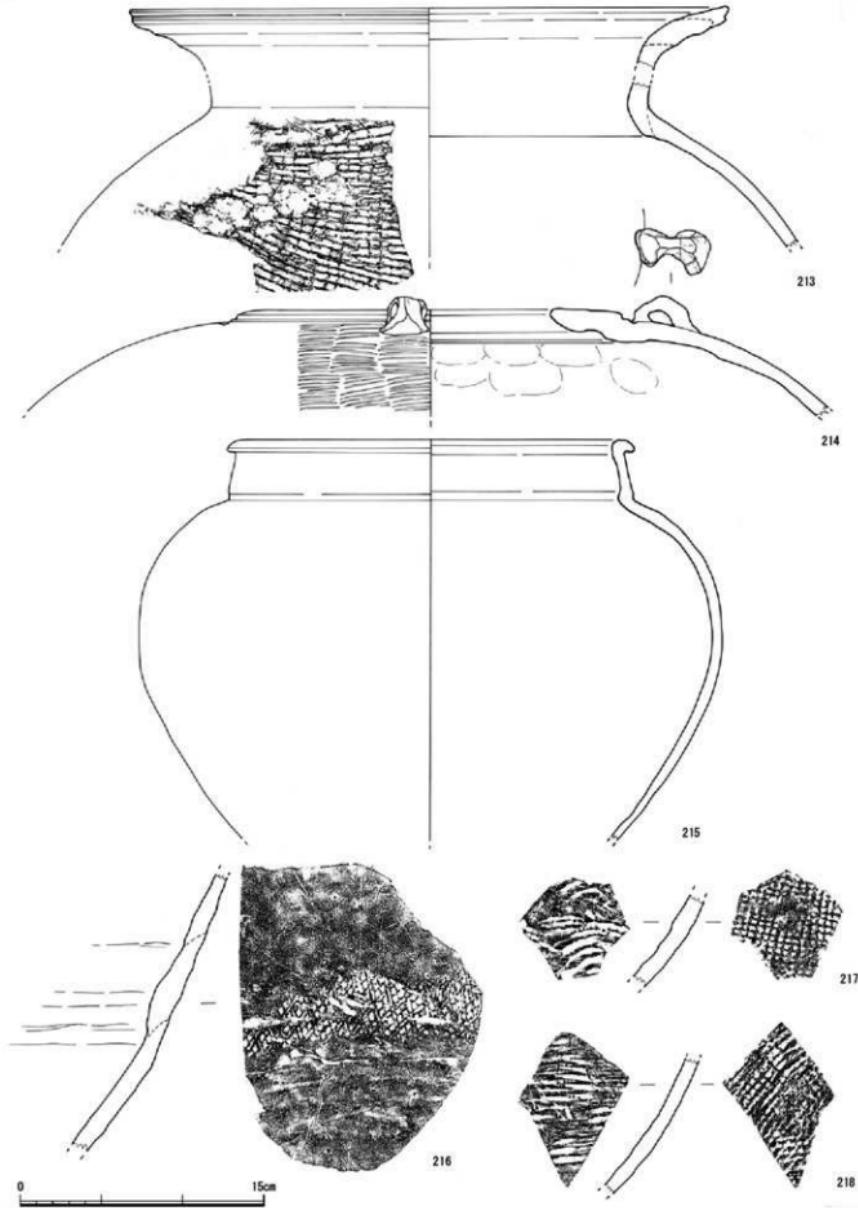


図 26 構状遺構 SD059 出土遺物実測図 2 (1/3)

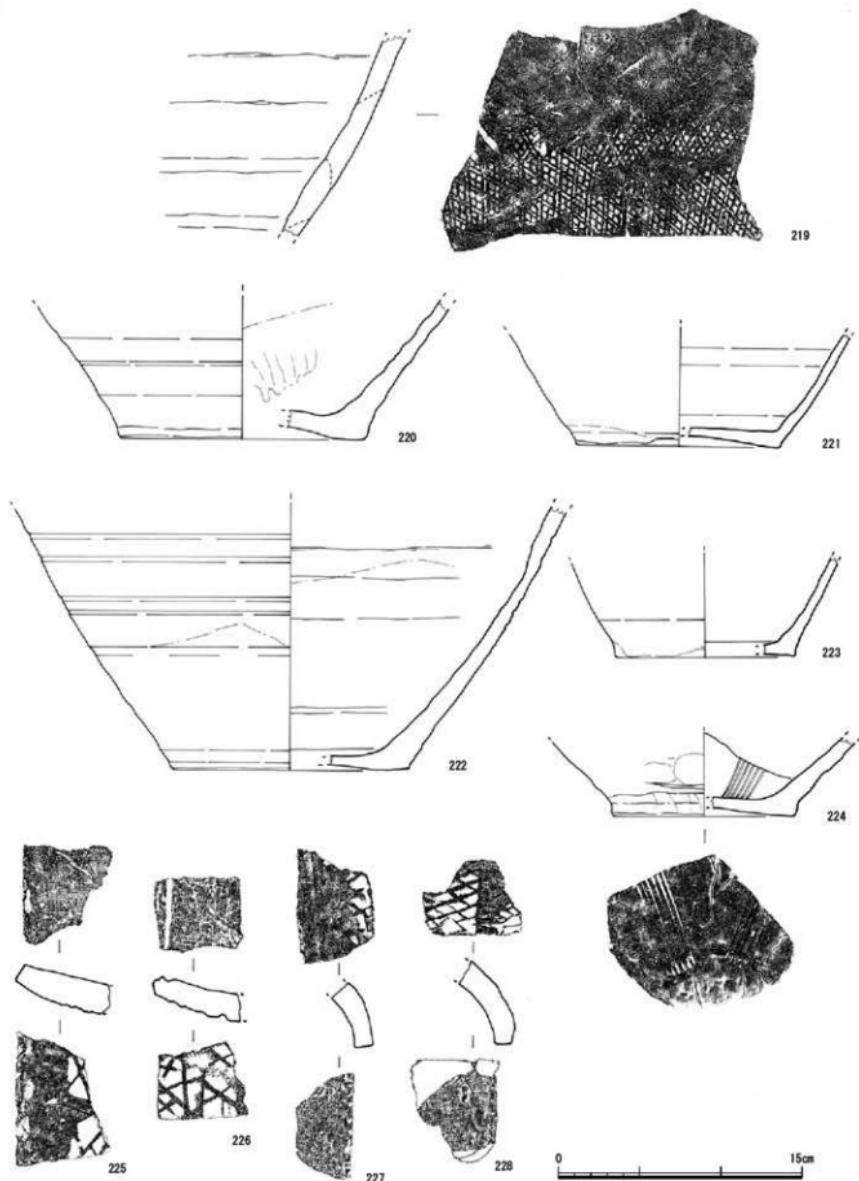


図 27 溝状遺構 SD059 出土遺物実測図 3 (1/3)

(5) 井戸 (図7・28~34、図版6~8)

井戸 SE069・SE070 (図7・28~29、図版8)

中世の井戸は、第3面の標高1.8mの遺構検出時に確認された。

SE069は径1.5~1.7mの掘り方を有し、中央の井筒は径0.5mで、井筒周囲は0.6mの隅丸方形の掘り方が確認された。229~234: 229は青白磁の合子蓋で植物の印花を施す。230は耀州窯の刻花文碗、12世紀。232は福建産I期の白磁碗。233は瓦器椀の口縁部。234はI期の白磁碗。

SE070は径1.8~2.0mの掘り方を有し、中央の井筒は径0.6m、井筒周囲には底部から0.5mの高さで幅10cmの範囲に玉石が充填されていた。井筒底の西側の壁に銅鏡250が立てかけた状態で出土した。235~250: 235は福建産I期の白磁碗。236はI期広東産の白磁皿、黄色を帯び胎土に砂礫を含む。238は青磁碗。239は福建産I期の白磁碗。242はヘラ切り底の土師皿。243は糸切り底の土師皿。244は同安窯系青磁碗。245は潮州窯(広東省)の鉢。246はIII期龍泉窯(浙江省)の皿。247はII期柳描文青磁皿。248は糸切り底の坏。銅鏡250は、径10.3cmで中央に高さ0.65cmの鈕を有す、161.5g。鏡背は無文で、鋒が著しい。厚さ0.6cmの鏡縁の内側に断面三角形の園線が廻る重圓文鏡。

井戸 SE057 (図7・30・31、図版6)

SE057の掘り方は、II区の道路状遺構の基盤層を除去した標高2.3mの面で検出された。標高1.9mで長径0.75mの不整円形の黒色粘質土の範囲が井筒にあたる。井筒の最下面是標高1.0m付近にあたる。251は福建産I期の白磁碗。252・253は鰐縁口縁の皿、龍泉窯13世紀後半~14世紀前半。254は瀬戸陶器の壺もしくは水注。255・256は糸切り底の土師器坏。257・258は掲軸壺の口縁部。259は製塩土器。特有のタタキ目があり、外面に煤を付す。260は12世紀代の福建産白磁碗、外底に墨書あり。261は瓦器椀、口縁の内側に沈線が廻る。262は内黒土器、表面の剥離が著しい、径20.2cm。263は瓦質の鉢。264は糸切り底の瓦器椀、口唇部から口縁部の外側にかけて黒色の吸着がみられる。

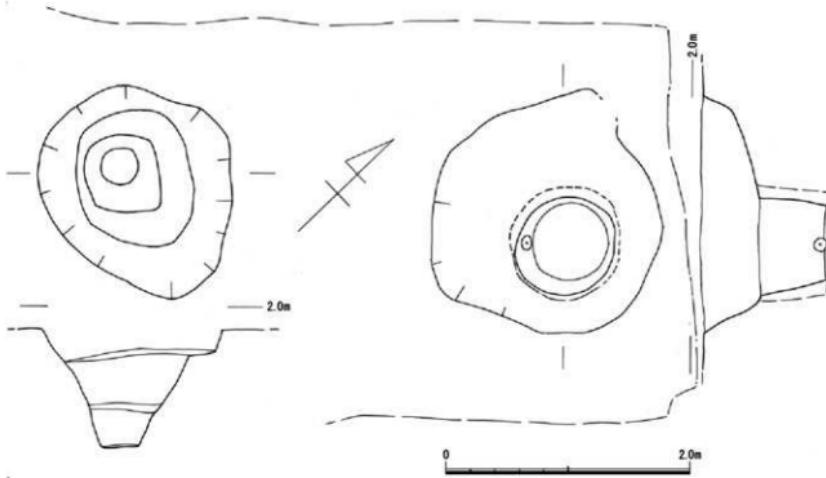


図28 井戸 SE069・070 遺構実測図 (1/40)

井戸SE063・064(図7・32・34、図版7)

I区北側の標高2.3mの面で検出された。SE063はSE064の掘り方によって切られている。SE064: 265は11世紀末の天目碗、口縁部はゆるく外反し、胎土は暗灰色を呈する。266は白磁小壺。潮州窯(広東省)。267はI期広東産の白磁皿。268はI期の白磁碗。269はI期福建産の白磁碗。271は龍泉窯の錦蓮弁文の碗。272はI期広東産の白磁碗。270・273は糸切り底の土師器坏。



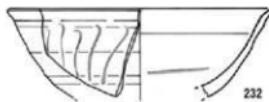
229



230



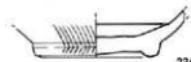
231



232



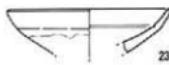
233



234



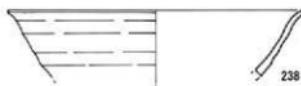
235



236



237



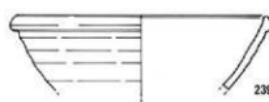
238



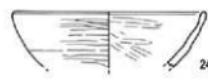
240



242



239



241



243



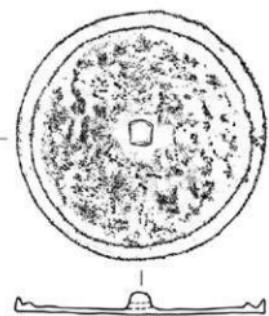
244



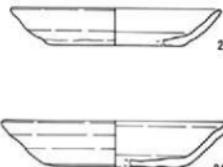
245



246



250



248



249



247



図29 井戸SE069・070出土遺物実測図(1/3)

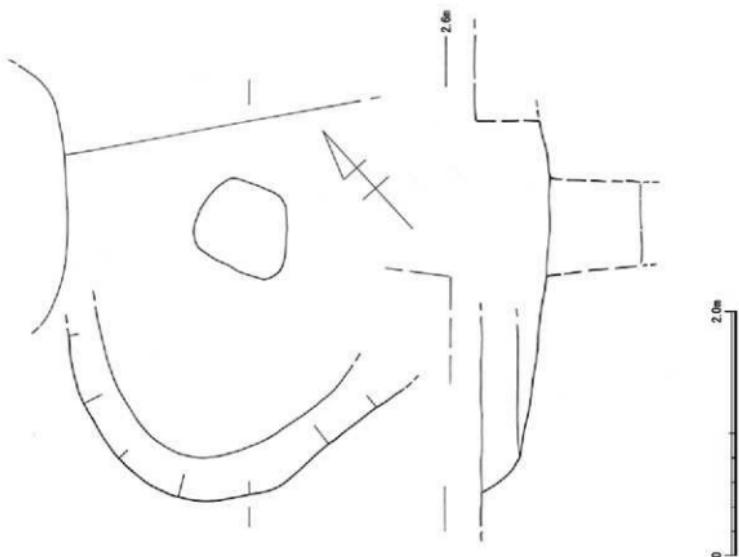


図30 井戸SE057 遺構実測図 (1/40)

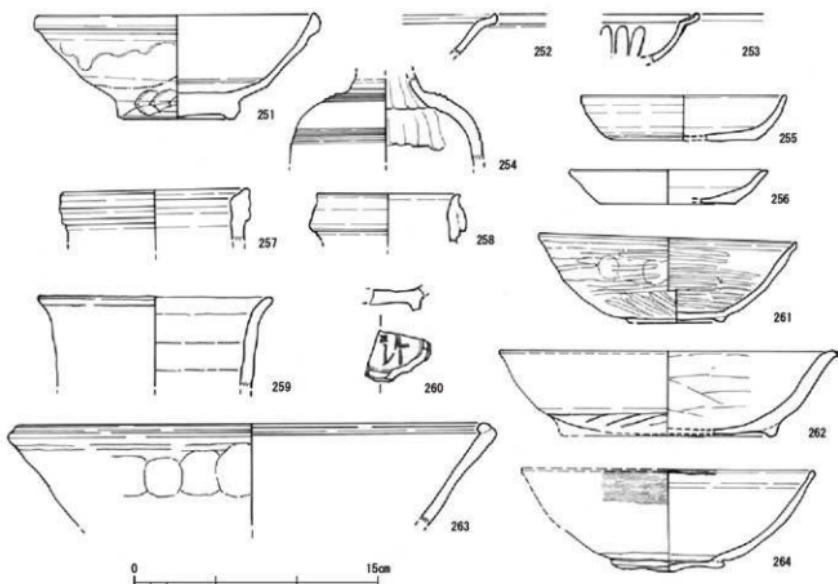


図31 井戸SE057 出土遺物実測図 (1/3)

SE063: 274はII期福建産の青磁碗、大宰府分類で初期龍泉・同安窯系とされる。275は福建産II期の白磁碗。276はI期広東産の白磁碗で外底に「上」の墨書きがある。277は須恵器大甕の口縁部。278はIII期龍泉窯の青磁碗。279はIII期龍泉窯の鎌蓮弁文碗。280は13世紀後半の口禿白磁皿。282は磁窯の小壺。286は12世紀中頃から後半の輪状釉剥ぎの白磁碗。287は土師器坏の小片。

井戸SE065(図7・33・34、図版7)

SE065はI区の標高2.0mの面で検出された。西側は奥壁にかかるため掘削は半分に限られた。井戸の掘り方は径1.8m、井筒は径0.4mほどで調査区内の中世井戸では小型である。281～287: 281の土器碗は高台の底に糸切り痕がみられる。283は玉縁の白磁碗、小型。284はI期広東産の白磁皿。285はI期福建産の白磁碗。

井戸SE066(図7・33・34、図版7)

SE066はI区南西の標高2.0mの面で検出された。西側は奥壁にかかっている。井戸の掘り方は径2.4m、井筒は径0.7mほどである。288～292: 288は井筒出土の白磁碗。289は井筒で出土した瓦器碗の底部。290は押し出し技法による坏で、底部に板目がみられる。291は糸切り底の土師皿。292は白磁皿の小片。

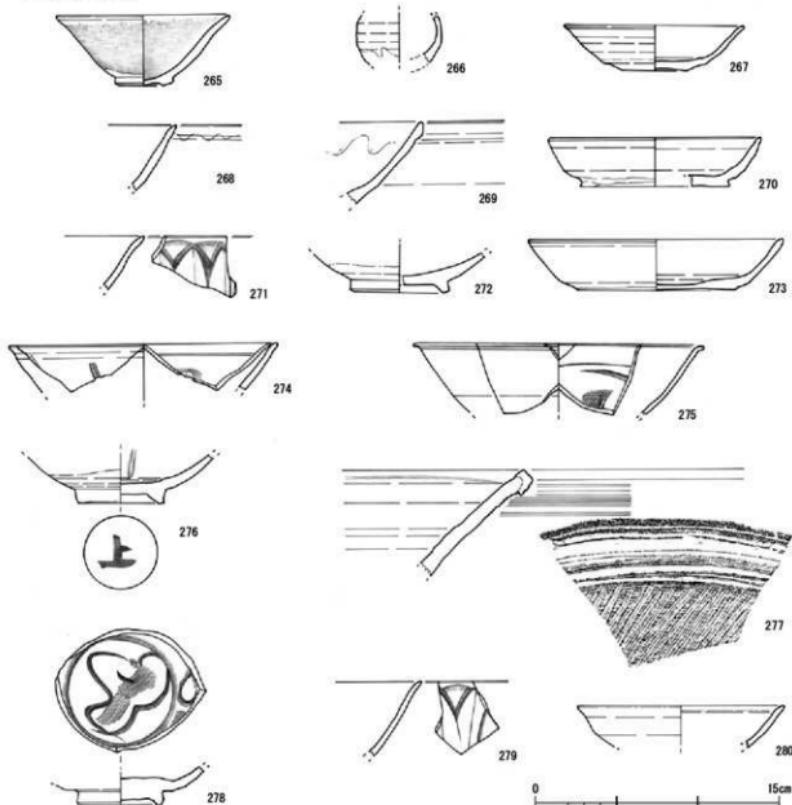


図32 井戸SE060・064出土遺物実測図(1/3)

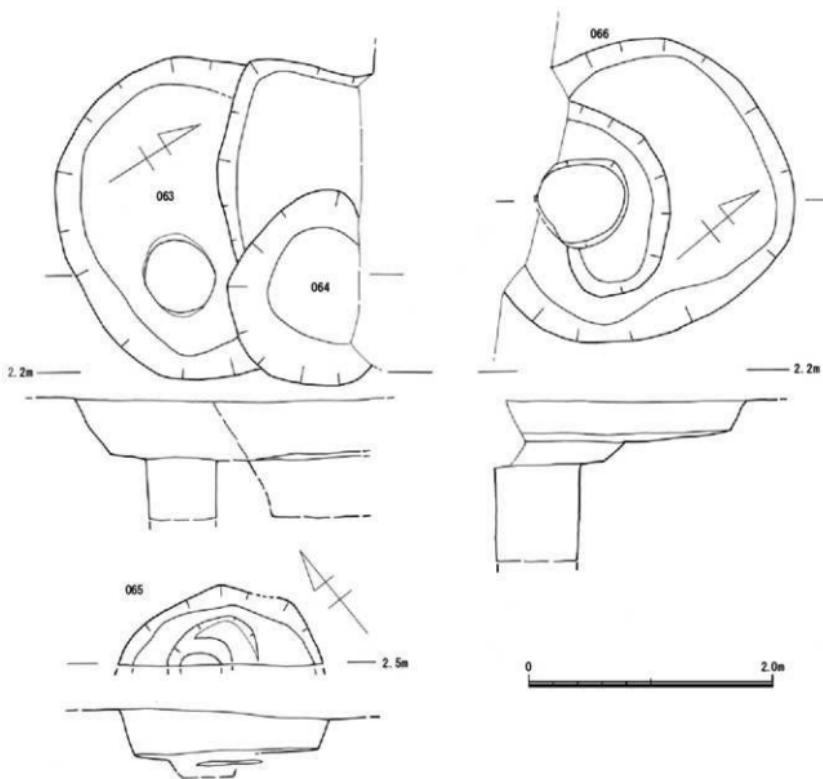


図33 井戸 SE063・064・065・066 遺構実測図 (1/40)

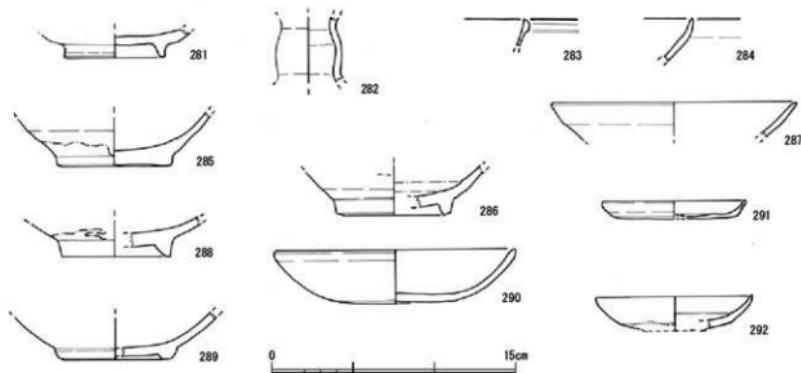


図34 井戸 SE062・066 出土遺物実測図 (1/3)

IV 各論

1. 双層碗について

双層碗は、深めの碗（外碗）の内側に浅めの碗（内碗）を接合した重層の器で、底部には円孔が穿たれている。1978年、博多遺跡群の初期の緊急調査（1・4次調査）によって知られるようになったが、外碗と内碗は遊離したものや、細片で点数も限られていたため注目されたのは、1991年、74次調査で全形がわかる資料が出土して以来である。今回229次調査で3・4層掘削の際に完全な姿で検出することができた。以下に博多遺跡群出土の双層碗の概要を示す（図35・39）⁶⁾。

表2 博多遺跡群出土の双層碗一覧

図35	次数	報告書	調査番号	部位	概要
301	HKT 1	543集 9-78	7810	外碗	口径16.0cm、器高5.5cm、底径9.8cm、孔径4.8cm、胎土：灰色、釉：オリーブグリーン、12世紀後半。
298		543集 12-107	7810	内碗中心部	見込周縁8.0cm、胎土：灰色、釉：明緑灰色（表）・褐色の地に薄い緑灰色（裏）、12世紀後半。
302		543集 12-108	7810	外碗穿孔部	孔径約3.6cm、胎土：灰色、釉：オリーブグリーン（表）・褐色の地に緑灰色（裏）
295	HKT S-2 H区	193集 30-1360	7833	外碗・内碗	接合部の破片、胎土：灰色、釉：オリーブグリーン（表）・オリーブグリーン（裏）、北宋末～南宋初、12世紀初頭
		193集 30-1361	7833	内碗の一部	内外両面にオリーブグリーンの釉がかかること、30-1360と同一個体か。
	HKT 4	86集 56-413	7930	外碗・内碗	接合部の破片、所在不明。
303		86集 11-D1-12	7930	外碗穿孔部	孔径3.6cm、胎土：灰色、釉：内外両面にオリーブグリーン。
304	HKT 35	396集 9-209	8648	外碗穿孔部	孔径3.6cm、胎土：灰色、釉：明緑灰色。
300	HKT 62	397集 341-93	8963	外碗	孔径約5.0cm、胎土：灰色、釉：明緑灰色、被熱の痕跡、12世紀後半。
297	HKT 74	395集 75-41	9126	外碗と内碗 が一体	口径17.5cm、器高7.1cm、底径9.1cm、孔径3.8cm、1022g、胎土：灰色、釉：オリーブグリーン（表）・褐色の地に緑灰色（裏）、12世紀後半、重文。
299	HKT 107	706集 129-58	9778	外碗穿孔部	胎土：灰色、釉：緑灰色（表）・褐色の地に茶灰色（裏）
293	HKT 221	未刊	1805	外碗・内碗	接合部の破片 越州窯系青磁、北宋後半～南宋初、12世紀初頭
294	HKT 223	1417集	1823	外碗・内碗	接合部の破片 越州窯系青磁、北宋後半～南宋初、12世紀初頭
296	HKT 229	1419集	1909	完形	口径16.2cm、器高6.2cm、底径9.2cm、孔径4.2cm、822g、底部：赤褐色、釉：オリーブグリーン、12世紀後半。

※HKTは博多遺跡群の略。報告書は『福岡市埋蔵文化財調査報告書』の番号。報告書下段は挿図と遺物番号。調査番号は調査年度の暦年の下2桁+調査の順。

小結

博多出土の双層碗は、当初、南宋の龍泉窯系青磁を主体とするとみられていたが、今回さらにさかのぼる時期の資料が確認された。221次・223次調査の2点であり、これらは北宋後半～南宋初頭にかけての越州窯系青磁とみられる。

双層碗は、中国では挾層碗、暖碗、骰盤、諸葛碗、公明碗など形状や用途、説話に起因する呼称がある。出現は、越州窯の時期にさかのぼり、龍泉窯の時期に盛行し、以後明代の景德鎮などでも生産された。

これまで箱崎遺跡では確認されておらず、国内における分布や出現の背景に関してはまだ多くの課題がござる。

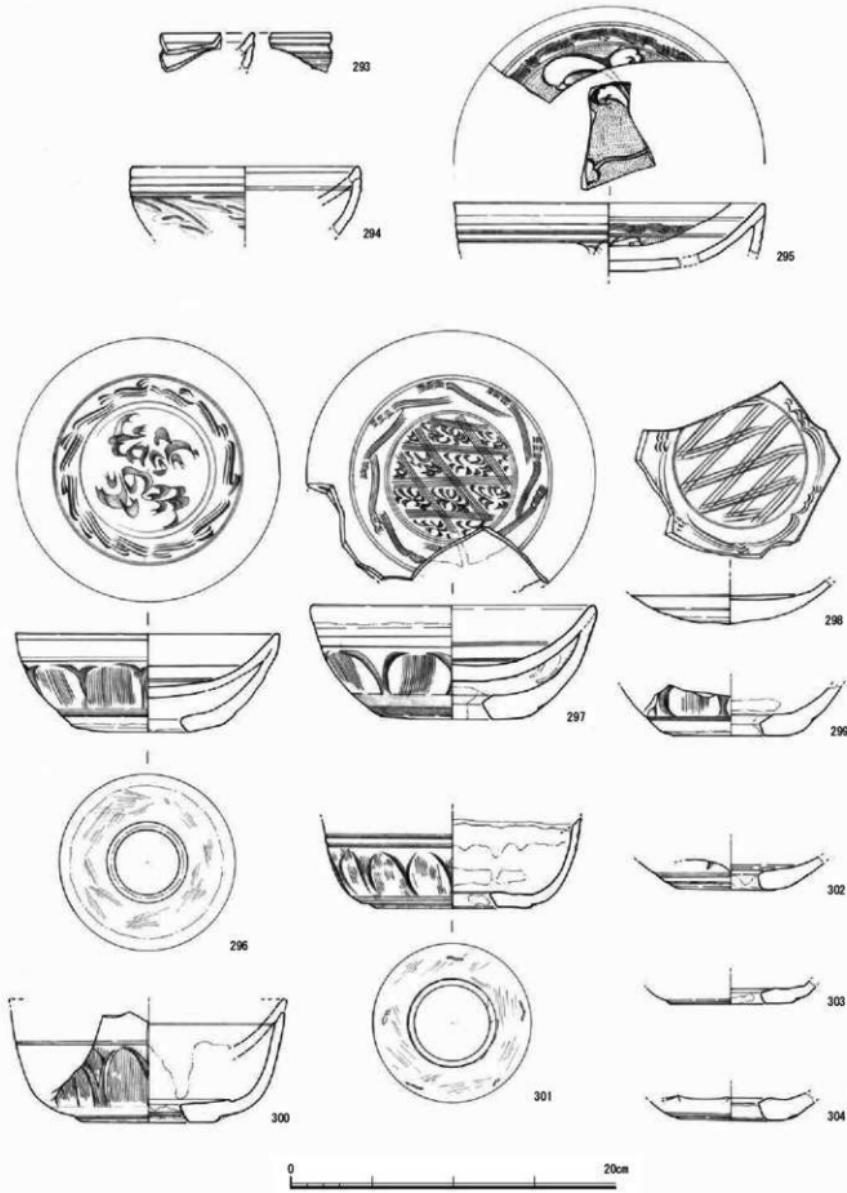


図35 博多遺跡群出土の双層碗実測図 (1/3)

2. 博多遺跡群229次調査出土の美濃焼茶陶について

山崎 龍雄

福岡市では安土桃山時代の美濃茶陶は、福岡城下町第1次調査で初めて出土を確認し、以後、各地点で確認された。博多遺跡229次地点でも確認したので、市内の出土状況を報告するものである。

近世初期安土桃山時代、千利休により近世のわび茶が確立する。それまで喫茶茶碗は中国や朝鮮の輸入陶磁器を用いていたが、この時代から武士の好みに合わせた国産の茶陶が焼かれるようになる。その代表産地が岐阜県美濃地方の志野焼・織部焼の茶陶である。豊臣秀吉による朝鮮出兵に参戦した九州の諸大名は、朝鮮の優れた製陶技術を持つ陶工を連れ帰り、大名の地元で陶器を焼かせ、茶陶なども焼かせる。それが唐津焼、高取焼、薩摩焼などである。志野・織部焼はそれとは異なり、中世六古窯の瀬戸焼の伝統のもと、大陸の焼物技術の影響を受け、武家の好みに合うように作り出された。

志野焼は室町時代後期の茶人志野宗信が美濃の陶工に焼かせたのが始まりとされる。織部焼は志野焼より新しく、千利休の弟子で大名茶人の古田織部が美濃の陶工に焼かせたもので、武家の気風にあった焼物である。江戸時代初め慶長年間に主に焼かれた。これらの茶陶は黒田氏や細川氏など豊臣・徳川大名が九州に大名として赴任した地域で主に出土する。豊前の小倉城・豊後の岡城、長崎の長崎遺跡群などで出土例があるが数は少ない。福岡では黒田氏の福岡城・城下町、国際交易港で栄えてきた商人の町の博多遺跡群などで17点の出土例がある。博多遺跡群では2点いずれも志野焼の向付である。福岡城下町遺跡では2遺跡で9点の出土がある。志野焼・織部焼の両方がある。向付が多い。残り6点は福岡城内の鴻臚館跡の調査で出土した。志野焼5点、織部焼1点確認されている。志野焼は向付、皿があり、織部焼は向付である。文様・形態から見て岐阜県土岐市の元屋敷窯産のものが多いと思われる。各遺物の詳細については表1を参照のこと。筑前国では遺跡出土例はまだ少ないと、今後博多遺跡群・福岡城下町遺跡など都市遺跡で、近世の遺構・遺物をより注意して調査を行えば、出土例が増えるものと思われる。

表3と図36にある福岡城下町第1次調査と、16・17以外は未報告の資料で、筆者が図を作成した。発表にあっては快諾をいただいた調査担当者に、記して感謝の意を表する次第である。

表3 福岡市内出土美濃焼、志野・織部焼茶陶一覧 案底径もしくは高台径

No.	遺跡名	古 期	考古学区分	出土遺物	性質	輪郭	底面	目録	直径 (mm)	輪郭 (mm)	底面 (mm)	外側 (mm)	内側 (mm)	足径 (mm)	支承面 (mm)	表面 (上) 装飾 (下)	文様 (上) 装飾 (下)	特徴	時代	目
1	福岡城下町	1	1-29	0401273 井筒1号	茶壺	織部	丸形	2.3	11.2 × 11.7	4.7	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	白地に墨絵	白地に墨絵	白地に墨絵	江戸後期	1
2	福岡城下町	1	1-30	0401172	茶壺	織部	圓筒形	丸形	11.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地に墨絵	白地に墨絵	白地に墨絵	江戸後期	1
3	福岡城下町	1	1-30	0401056	茶壺	織部	圓筒形	丸形	11.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地に墨絵	白地に墨絵	白地に墨絵	江戸後期	1
4	福岡城下町	1	1-32	0401240 83	茶壺	志野	圓筒形	小形	6.6 × 7.2	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
5	福岡城下町	1	1-32	0401221 1-1	茶壺	志野	圓筒形	小形	6.6 × 7.2	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
6	福岡城下町	1	1-38	0401119	茶壺	志野	圓筒形	白磁片付	9.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
7	福岡城下町	1	1-46	1001-1整備直面	茶壺	志野	圓筒形	直形	10.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
8	福岡城下町	1	1-280	0401041	瓶	志野	圓筒形	小形	6.6	6.6	6.6	6.6	6.6	6.6	6.6	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
9	福岡城下町	1	1	0401043	茶壺	織部	圓筒形	丸形	11.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
10	福岡城下町	1	1	0401044 N	茶壺	織部	圓筒形	小形	4.6 × 5.6	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
11	福岡城下町	1	1	0401200 1	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
12	福岡城下町	1	1	0401200 2	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
13	福岡城下町	1	1	0401200 3	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
14	福岡城下町	1	1	0401200 4	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
15	福岡城下町	1	1	0401200 5	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
16	福岡城下町	1	1	0401200 6	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
17	福岡城下町	1	1	0401200 7	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
18	福岡城下町	1	1	0401200 8	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
19	福岡城下町	1	1	0401200 9	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
20	福岡城下町	1	1	0401200 10	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	16.7 × 9.3	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	8.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1
21	博多遺跡群	1	125	0401-07	茶壺	志野	圓筒形	直形・直面	17.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	9.0	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	白地の上に墨絵	江戸後期	1

註1 福岡市教育委員会 2017「福岡城下町道路1-福岡城下町道路第1次調査の報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』

第1322集より転載



図36 福岡市内出土美濃焼、志野・織部焼茶陶（1/4）

1～8は福岡城下町1次
9は福岡城下町4次、10は福岡城59次
11～15は福岡城69次
16は博多造跡群203次、17は博多造跡群229次

3. 博多遺跡群229次・232次調査出土の動物遺体・骨角製品

新美 倫子（名古屋大学博物館）

博多遺跡群の229次・232次調査では、遺構埋土や包含層から動物遺体343点と骨角製品2点が出土した。これらはいずれも調査時に取り上げられたもので、所属時期は古代から近世にわたっており、動物遺体は魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が見られた。すべての動物遺体について出土種名を表1に、出土内容を表2～5に示し、骨角製品については図37に示した。なお、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、福岡市埋蔵文化財課の常松幹雄氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

1. 魚類（表2）

12世紀から近世までの資料21点が出土しており、サメ類12点、マダイ5点、フグ類2点、マグロ類1点が見られた。サメ類は直径3～4cmの椎骨が11点と歯が1点出土した。マダイは体長50～60cm程度の資料が多く、フグ類は大型個体の歯板が見られた。マグロ類は中型個体の椎骨である。

2. 爬虫類

229次調査のI区北4～5層で、12～13世紀のスッポン背甲破片が1点出土した。

3. 鳥類（表3）

12世紀から近世までの資料が12点出土した。このうち種を同定できたのは、シャモ2点、ニワトリ2点、カモ類1点、キジ1点である。シャモは2点とも近世の資料で、現生シャモ雌標本と比較すると、脛骨は同程度の大きさであったが、中足骨は長さは同じだがやや細かった。ニワトリ2点は12～13世紀の資料と16～17世紀の資料で、両方とも現生白色レグホン♀と長さは同程度だがかなり細い。カモ類は中世の資料で、現生オナガガモ♂と同程度の大きさの上腕骨である。

4. 哺乳類（表4・5）

a. 陸獣類（表4）

古代から近世にかけての資料が160点出土した。このうち種を同定できた資料は、シカ33点、イノシシ類20点、ブタ？2点、イス11点、ウシ9点、ウマ4点、タヌキ2点、ネコ1点であった。シカは現生標本（愛知県産）と比べて同程度か、それよりやや小さい資料が多いが、これらよりかなり小さく現生標本の2/3程度の大きさの資料も5点見られた。角は切断された破片がほとんどで、これらは加工品製作の原材だったと思われる。イノシシ類とした資料はイノシシかブタかはつきりしないものであるが、現生イノシシ標本（岐阜県産）よりかなり大きく、骨が肥大した13～14世紀のI区北3～4層出土資料2点はブタ？とした。

イヌには埋葬された状態で出土した資料はない。12～13世紀のII区4～5層からは頭蓋骨と下顎骨が出土しており、表6・7にこれらの計測値と最大頭蓋長・下顎骨全長から推定した体高を示した。頭蓋骨は右側吻部が破損し、左右の頬骨弓が欠損しているが中型犬の大きさであり、歯は現生柴犬標本程度の大きさで、推定体高は48.2cmである。鼻骨欠損のためよくわからないが、ストップはおそらく比較的はつきりしており、吻部幅はやや広いと思われる。頬骨弓の張り出しの状況は不明である。矢状稜はあるが発達せず、後頭部はそれほど高くない。下顎骨は現生柴犬標本程度の大きさで推定体高は37.2cmである。下顎底はやや丸く、骨体の高さは平行に近く、歯列の湾曲は少ない。他に12～13世紀のI区069出土寛骨も現生柴犬標本と同程度の大きさであり、坐骨部分に解体痕が見られた。また、中世のII区検出面下層出土上顎骨の第4前臼歯は、長さ16.6mmであった。

ウシは現生改良和種標本と比べると、12～13世紀のI区4～5層出土下顎骨はひとまわり小さく、近世のI区006出土上腕骨・橈骨は同程度の大きさであった。

b. 海獣類（表5）

古代から近世にかけての資料が148点出土し、このうち100点はイルカ・クジラ類であった。残りの48点については、小さな破片なので鰐脚類である可能性も否定できないことから海獣類としたが、

これらもほとんどはイルカ・クジラ類と思われる。一般にクジラ類のうち体長4m以下の小型のハクジラをイルカ類と呼ぶが、実際には体長4m以下でもクジラと呼ばれる種もあり、両グループは一部重複している。そこで表5では、この重複部分にあたるイルカかクジラか判別できない資料をイルカorクジラとした。表5でクジラとした資料も、そのほとんどは体長5~6mのオキゴンドウ程度、あるいはそれ以下の大きさの個体であり、これより大きな資料は2点のみであった。2点のうち1点は13~14世紀のII区046中層出土の椎骨で体長10mを超えるクジラと思われ、もう1点は16~17世紀のI区1~2面出土の椎骨で体長7~8m程度の個体と思われる。体長5~6m以下のイルカ・クジラ類が多数利用される状況は、12世紀から近世まであまり変化していない。近世の229次I区007近世土坑から出土したイルカorクジラの頭蓋骨破片には、骨製の刺突具先端部が刺さったままの例が1点見られた。

なお、他に陸獣か海獣か判別できない13世紀の骨片が、229次調査のII区046北下層で1点出土した。

5、骨角製品

2点の骨角製品はいずれも229次調査で出土した。1点はI区北壁黄色砂層から出土した古代~12世紀の資料であり、器種不明である(図37-306)。欠損部分が多いが、断面が隅丸長方形で、反った筒状の形をしていたと思われる。残存する端部の切断面はなめらかである。残存部の長さは37.5mm、断面の長辺は16.6mmである。器壁の厚さは1~1.5mmとかなり薄く、外面はややでこぼしているが、内面は比較的なめらかである。原材料は組織の状態から見て骨ではなく鹿角でもないが、それ以上は不明である。

もう1点はII区053基盤層から出土した13~14世紀の骨製品で、器種不明である(図37-305)。全体は細長い短冊状であるが、片端に向かって幅がやや細くなっている。残存部の長さは70.3mm、幅は14.0mm、厚さは3.5mmであり、断面はかまぼこ形であることから、刀装具の笄かもしれない。凸側の面にはさじ状の凹みを削り出している。また、裏の平坦面には羽根と刀剣の模様が線刻で表現されている。凸側の面の中心にはわずかに細い溝が残っていることから、シカの中手骨中間部の前面を利用したと考えられる。

表2 魚類出土内容

表1 出土動物種名	
I. 魚類	IV. 哺乳類
1 サメ類	1 タヌキ
2 マダイ	2 イノシシ類
3 マグロ類	3 シカ
4 フグ類	4 イヌ
	5 ネコ
II. 鰐虫類	6 ウシ
1 スッポン	7 ワマ
	8 ゴンドウクジラ類
III. 鳥類	9 クジラ類
1 キジ	10 イルカ類
2 カモ類	
3 ニワトリ	
4 シャモ	

時期	調査	区	遺構・層	種	部位・出土量	計
12~13世紀	229	I区	4~5層	サメ類	椎骨1	5
		II区	057(SE)	サメ類	椎骨3	
			059(SD)	種不明	椎骨半欠1	
13~14世紀	229	I区	3~4層	マダイ	上顎骨右1	6
			フグ類	歯板左上1		
		II区	046南中層	サメ類	歯1	
14世紀	229	II区	049側溝	サメ類	椎骨1	1
			062~	マダイ	前上顎骨右1	
				サメ類	歯1	
15~16世紀	229	I区	031~	サメ類	椎骨半欠1	1
			018~	サメ類	椎骨1	
			006腋骨	サメ類	椎骨1	
近世	229	I区	007近世土坑	サメ類	椎骨1	7
			041近世土坑	マダイ	歯骨右1	
		II区	047近世	サメ類	椎骨1	
				計		21

表3 鳥類出土内容

時期	調査	区	遺構・層	種	部位・出土量	計
12~13世紀	229	II区	057(SE)	ニワトリ	大脚骨右1	1
14世紀	229	II区	046上層	種不明鳥	四肢骨中破片1	1
15~16世紀	229	I区	091石基礎下層	種不明鳥	四肢骨中破片1	1
		II区	2~3層検出面	種不明鳥	四肢骨中1	1
中世	229	I区	012検出面	カモ類	上腕骨右1	1
				ニワトリ	大脚骨左上1	1
16~17世紀	229	II区	1~2層検出面	種不明鳥	四肢骨中破片1	2
				シャモ	脛骨左上1, 中足骨右1	1
近世	229	I区	007近世土坑	キジ	中足骨左上1	5
				種不明鳥	上腕骨右中1, 四肢骨中破片1	1
				計		12

註 上: 近位部、中: 中間部、下: 遠位部、上・中・下のないものは完存。

表4 隋獸類出土內容

時期	調査区	遺跡・層	種類	個数・出土量	計
古代～12世紀	I区	北東6-7層(西)	イノシシ類	大頸骨右下1	7
		北東6-7層(東)	豚	豚頭片2	
		6-7層	シカ	上腕骨右中1	
			豚	四肢骨脛骨2	
			豚	四肢骨脛骨2	
	II区	061(セ?)	豚	四肢骨脛骨2	68
		63	ウシ or ワマ	四肢骨脛片1	
		064(井?)	シカ	椎骨石上1	
		069-	オヌマ	椎骨石上1	
			ラク or イノシシ類	椎骨石上1	
12～13世紀	I区	北4-5層	豚	上腕骨頭片1	1
			豚	頭片4	
		4-5層	ウシ	下顎骨左(P12頭骨(?) + 右(P12×P2×X2) 脊骨1	
			シカ	脊骨左1	
			豚	四肢骨脛片1	
	II区	シカ	四肢骨脛片1	1	
			シカ	中手骨右下1, 椎骨石上1, 手中1	
			イノシシ類	中手骨右下1, 中手骨左中1	
			ウマ	下顎角骨片1, 中手足骨2	
			シカ or イノシシ類	頭骨片3	
	III区	シカ or ウシ?	ウシ or ワマ	四肢骨脛片2	1
			豚	四肢骨脛片2	
			シカ	四肢骨脛片3	
			シカ	四肢骨脛片3	
			シカ	四肢骨脛片3	
13世紀	II区	036 北上層	シカ	上腕骨右下1, 手骨を上1	1
			シカ	大頸骨左1	
		北3-4層	ブタ?	上腕骨右中1, 上頸骨右中片1	
			豚	頭片1	
		3-4層(南)	シカ	人頭骨右下1, 頭骨左頭面のみ	
	III区	タヌキ	上腕骨左下1	1	
			シカ	四肢骨脛片1	
			シカ	四肢骨脛片1	
			シカ	四肢骨脛片1	
		046 中層	シカ	大頸骨左中1, 中足骨中1, 角骨片(原材)1	
	IV区	046 雨中層	シカ	頭骨右1, 烈鱗片(原材)1	42
			シカ or イノシシ類	頭骨片1	
			ウシ or ワマ	頭片2	
			豚	頭片2	
			シカ	角骨片(原材)1	
13～14世紀	II区	046 下層ベルト	イノシシ類	頭骨左中1, 頭骨右中1, 角骨片(原材)1	1
			シカ or イノシシ類	頭骨片1	
			豚	四肢骨中頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
		046 南系腰帯	イノシシ類	腰椎右1	
	III区	046 潟崎時	豚	頭片4	1
			ウシ or ワマ	頭片1	
			豚	四肢骨中頭片1	
		049 西側廻	シカ	角骨片(原材)1	
			豚	四肢骨中頭片1	
	IV区	052-	イノシシ類	腰椎右1	1
			シカ	腰椎右1幼	
			豚	頭片1	
		053 系腰帯	イノシシ類	腰椎片1	
			豚	角骨片(原材)3	
14世紀	II区	3-4層廻出面	シカ	頭片1	1
			豚	四肢骨中頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
		049 側廻	イノシシ類	腰椎右1	
	III区	1-5層	シカ	腰椎右1	2
			豚	頭片1	
		091 石塀縁下塗	イヌ	半足骨管上1	
		033 石垣	シカ	大頸骨左中1	
		2-3層廻出面(石塀縁下)	豚	四肢骨中頭片1	
15～16世紀	II区	098 梅干廻上	イノシシ類	半足骨管上1	1
			シカ	半足骨管上1, (×) P3H1(?)	
			シカ	腰椎片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
		098 梅干廻上	シカ	四肢骨中頭片1	
	III区	横出面廻面	シカ	四肢骨中頭片1	4
			豚	頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
		096 衣冠廻面	シカ	四肢骨中頭片1	
	IV区	1-5層	ウシ or ワマ?	四肢骨中頭片1	3
			豚	四肢骨中頭片1	
		1-4層廻出面	豚	四肢骨中頭片1	
		1-2層	シカ	半足骨管上1	
		1-2層廻出面(廻上)	シコ	半足骨右1	
16世紀	II区	1-2層廻出面(廻上)	シカ	半足骨右1, 肘管片1	3
			シカ	四肢骨中頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
		096 衣冠廻面	シカ	四肢骨中頭片1	
	III区	096 衣冠廻面	シカ	四肢骨中頭片1	16
			シカ	四肢骨中頭片1	
			シカ	四肢骨中頭片1	
		097 道土塙	イノシシ類	四肢骨中頭片1	
		047 道土塙	シカ	四肢骨右1	
	IV区	048 道土塙	シカ	半足骨右1	1
		049 道土塙	シカ	四肢骨右1	
			シカ	四肢骨右1	
		097 道土塙	シカ or イノシシ類	四肢骨右1	
			シカ	四肢骨右1	
近世	II区	097 道土塙	シカ	四肢骨右1	160
			シカ	四肢骨右1	

註 表3参照。I: 切歎、P: 前臼歎、M: 後臼歎、I+P+Mに伴う数字は歯の順番を示し、○のついた数字は前出處中であることを示す。○は被覆があることを示し、×は被覆が脱落していることを示す。鷲: 鷲骨部分、坐: 坐骨部分。鷲: 施けた資料、鷲: 助教、若: 若輩、助: 助教、若: 若輩のものは成績。

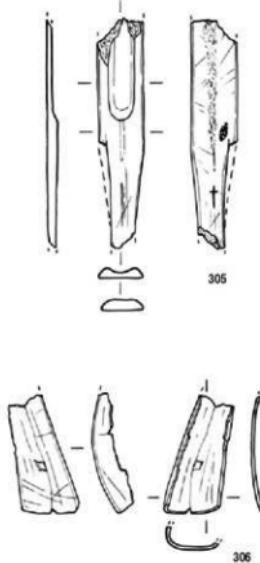


図 37 博多遺跡群 229 次出土の骨角製品 (2/3)

表5 海獣類出土内容

时期	调查	区	遺構・番	種	部位・出土量	計	
古代～12世纪	229	I 区	6～7層	イルカ or クジラ	肋骨片 1	1	
				イルカ	下頸骨左破片 1、歯 4		
			057 (SE)	イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 4、椎骨 2、肋骨片 6		
12～13世纪	229	II 区	058 (SE)	イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 1	39	
			4～5層	イルカ	下頸骨破片 1、歯 1、耳骨破片 1		
				イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 7、肋骨片 4		
13世纪	229	II 区	046 北下層	イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 1	5	
			046 北下層	海獣	肋骨片 2、破片 2		
		I 区	3～4層	クジラ	肋骨片 1		
			3～4層 (南)	イルカ	肋骨片 1		
			3～4層 (南)	海獣	破片 1		
			3～4層 (北)	海獣	破片 1		
13～14世纪	229	I 区	046 中層	イルカ	尺骨右 1 若か	34	
			046 大型クジラ	椎骨 1			
			046 南中層	イルカ or クジラ	肋骨片 1		
			046 下層	クジラ	椎骨破片 1		
			046 南下層	クジラ	椎骨 1		
				海獣	肋骨片 1		
				イルカ	下頸骨左破片 1		
			046 下層ベルト	クジラ	椎骨 1		
				海獣	肋骨片 1		
			046 基盤層	クジラ	破片 1		
			046 南基盤層	イルカ	歯 1		
			046 清掃時	海獣	破片 1		
			049 西側溝	海獣	肋骨片 4		
			052-	イルカ	頭蓋骨破片 1		
				ゴンドウクジラ	歯 1、椎骨 1		
			053-	イルカ or クジラ	肋骨片 1		
				イルカ	下頸骨破片 1、肋骨片 1		
				クジラ	椎骨半欠 1		
				海獣	肋骨片 4、破片 2		
			3～4層検出面	イルカ	椎骨 1 若		
14世纪	229	II 区	046 上層	イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 7、塊 3	15	
			049 側溝	イルカ or クジラ	下頸骨破片 1		
				海獣	破片 4		
12～16世纪	229	I 区	1～5層	海獣	破片 1	1	
			001 石基礎下層	クジラ	椎骨 1、椎端板 1 若		
15～16世纪	229	I 区	2～3層検出面	イルカ	頭蓋骨破片 1	8	
			2～3層 (東)	クジラ	頭蓋骨破片 1、椎骨 1		
		II 区	2～3層検出面	イルカ	椎骨 1		
				海獣	破片 2		
中世	229	II 区	検出面下層	イルカ	椎骨下 1 左右不明	5	
				クジラ	椎骨半欠 1		
				海獣	肋骨片 2		
	232	I 区	西トレンチ	クジラ	椎骨 1		
12～17世纪	229	I 区	1～5層	イルカ	頭蓋骨破片 1	1	
16～17世纪	229	I 区	1～2面	イルカ	椎骨 1 若、椎端板半欠 1 若	6	
				クジラ	椎骨半欠 1		
				海獣	破片 3		
中世～近世	229	I 区	027 トレンチ	イルカ	頭蓋骨破片 3	4	
			054 南トレンチ	海獣	破片 1		
				イルカ	椎骨 2		
			067 近世土塙	クジラ	椎骨 1		
				イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 4、肩甲骨右 1		
				海獣	肋骨片 1、破片 1		
				イルカ	破片 8		
近世	229	II 区	047 近世	イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 4	28	
			048 近世	イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 3		
			071	イルカ or クジラ	頭蓋骨破片 2		
		232	I 区	001 近世土塙	海獣	破片 1	
17世纪以後	229	I 区	007 近世	イルカ	椎骨 1	1	
					計	148	

註 表3・4参照。

表6 イヌ頭蓋骨計測値

計測項目	計測値
最大頭蓋長	I～P 182.0 ±
基底頭蓋長	B～P 167.7 ±
頭長	P～N 87.1 ±
吻幅	7～7 —
前頭幅	Ect～Ect 53.3
最小眼窓幅	Ent～Ent 36.8
最小前頭幅	fa～fa 34.6
顎弓幅	Zy～Zy —
頭蓋幅	au～au 63.3
	eu～eu 57.0
後頭部長	I～Br 55.3
後頭部高	B～Br 71.6
脳頭蓋長	I～N 100.2
前頭部長	Br～P 135.3 ±
第4前臼歯長さ	17.4
推定体高 (cm)	48.2

註 計測点は斎藤弘吉 (1963) による。計測値の単位はmmで、体高の単位はcmであり、±付きの数値は近似値を示す。推定体高は山内の算出方法に従い (山内 1958)。最大頭蓋長の計測値から算出した。

表7 イヌ下頸骨計測値

計測項目	計測値
P2P3 間の高さ	15.4
P3 中央部での高さ	15.8
M1 中央部での高さ	19.6
M1M2 間の高さ	20.2
P3 中央部での厚さ	9.3
M1 中央部での厚さ	10.5
M2 中央部での厚さ	10.0
第1後臼歯長さ	—
下頸骨全長 1	104.9
下頸骨全長 2	104.1
推定体高 (cm)	37.2

註 表6参照。推定体高は下頸骨全長 2 の計測値から算出した。

<引用文献>

斎藤弘吉 1963 「犬科動物骨格計測法」

山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定法」鹿児島大学農学部学術報

告7、125-131頁

Vまとめ（図38～40、図版10）

229次の調査成果について総括し、まとめとする。

まず道路状遺構を追認できたことがある。道路として機能したのは、中国や朝鮮の陶磁器の年代から中層が15世紀頃であることから、13世紀後半から16世紀代にかかる時期に存続したとみられる。また道路の西に近接した位置で石基礎が確認できたことである。石基礎SX004は15世紀後半から16世紀代までの間に少なくとも一度は建て替えが行われたとみられる。要因のひとつとして道路の嵩上にともなう地盤の変化が考えられる。16世紀代には中心的な倉庫SX004に付随して北側に建物域の増築が行われたことが石基礎001・023の配置から推察される。

またI区で検出された鋳造関連遺構SX008では30枚以上の無文銭が出土した。遺構の時期は15世紀後半の琉球銭「世高通寶」の時期を上限とするが、無文銭は16世紀代後半にかけて盛行したとみられることから、道路状遺構と保管目的の倉庫、錢貨や銅器などを素材とした鋳造関連遺構、すなわち道路、倉庫、鋳造工房が16世紀代のある時期に併存していた可能性がある。

また道路状遺構の築造をさかのぼる時期には中世前半の井戸の分布から12世紀～13世紀代には生活域として供されていたと推察される。その様相は調査区の西北に隣接する225次調査で出土した中国瓦の瓦当や今回出土した双層碗などから宋風文化の影響が色濃くうかがえる。

IV各論1の双層碗の集成から、北宋から南宋にかけての双層碗という特殊な器種が博多遺跡群の博多浜に集中する傾向が明らかとなった（図39）。中国瓦を葺いた祠堂などで用いられた什器であった可能性が想定される。双層碗や中国瓦の評価には中国系祭祀遺物を俯瞰した検証が必要といえよう。

出土遺物のなかで中国陶磁については田中克子氏（アジア水中考古学研究所）のご教示によるところが多い。資料説明の時期区分Ⅰ期～Ⅲ期は下記文献（田中2019）による。

I期：11世紀第3四半期～12世紀第1四半期

II期：12世紀第2四半期～12世紀第3四半期

III期：12世紀第4四半期～13世紀第1四半期

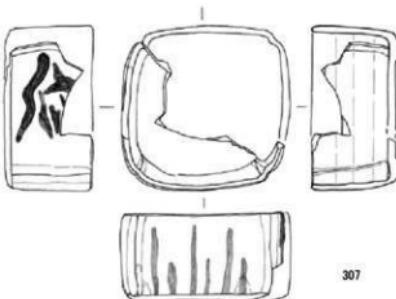


図38 土杭SK007 出土の志野向付（1/3）

【参考文献】

田中克子2019「日宋貿易期国内最大の流通拠点「博多」にもたらされた中国陶磁器—国内消費地との比較材料として—」『貿易陶磁と東アジアの物流—平泉・博多・中国—』高志書院

【道路状遺構に関する報告】

40次 福岡市教育委員会1990「博多15」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第230集

38次 福岡市教育委員会1992「博多25」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第280集

104次 福岡市教育委員会1999「博多67」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第594集

161次 福岡市教育委員会2009「博多126」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1038集

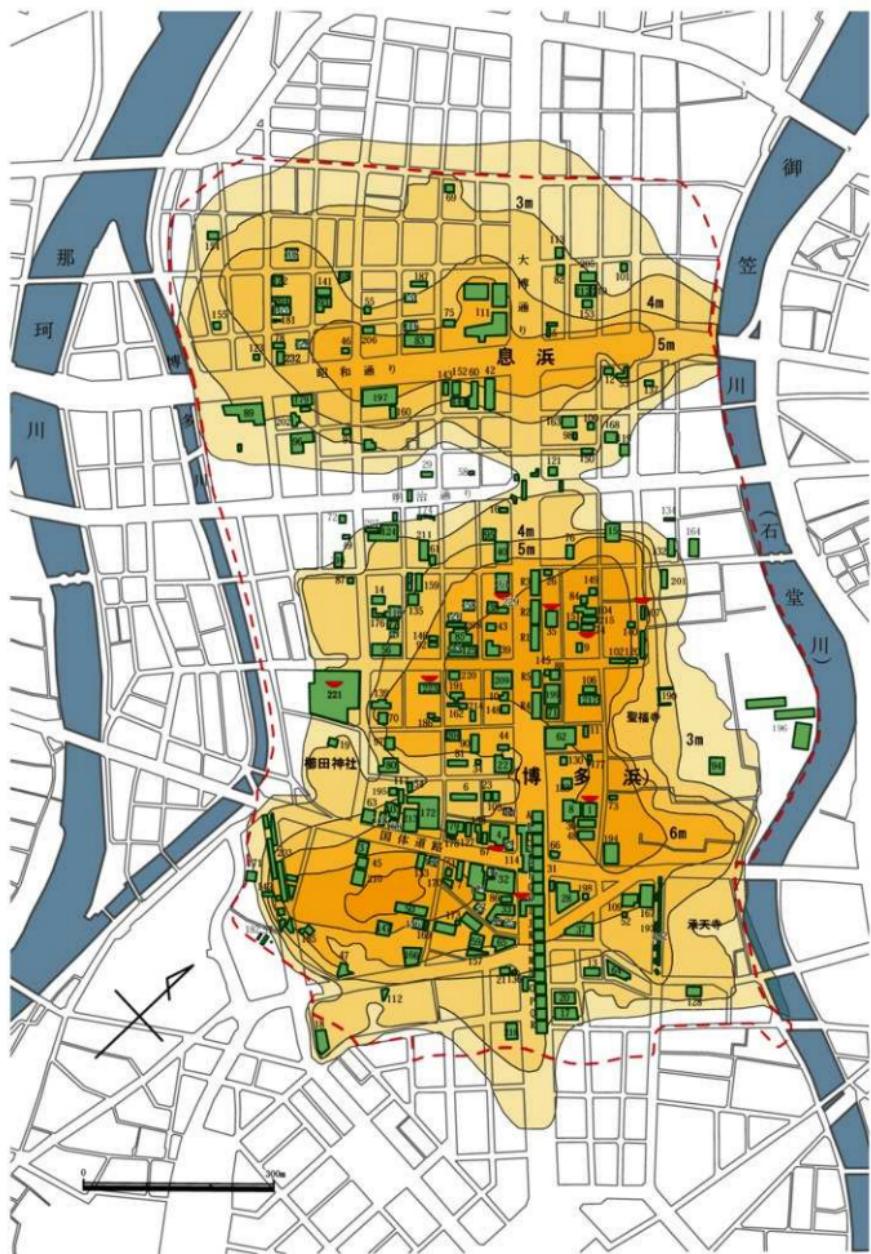


図39 博多遺跡群における調査地点 ■は双層碗の出土地点を示す

遺構出土遺物以外に近世遺構や調査区の反転時に遺物包含層で検出された陶磁器・金属器について紹介する。

陶磁器307は土坑SK007出土の志野向付。16世紀末に比定されるもので福岡城跡や福岡城下町遺跡など近年の発掘で志野・織部系統の茶陶が追認されてきている(IV各論2参照)。

308はI区検出面出土の白磁鉄絵皿で外底に墨を付す、I期の西村窯(広東省)。309は双層の白磁で燭台の受部片と推定される、外面に型押しによる蓮弁文がみられる、I区下層出土。310は黄釉合子の身、南宋の天目碗窯(浙江省)。311は輪状釉剥ぎの白磁皿で外底に「六」のような墨書きあり。312は緑釉壺の口縁部、磁州窯(河北省)I区中層出土。313は緑釉陶器の底部、磁州窯か、I区下層出土。314は玻璃製勾玉の破片、灰色～黒灰色を呈している、道路状遺構SX046の基盤層出土。315は玻璃製丸玉の破片、I区下層出土。

金属器

316はI区下層出土の薄手の金属製容器で緑青が付着している。口唇部は玉縁状に肥厚し、体部は打ち出しによる面取りがなされている。317はI区下層出土の金属製容器の口縁部で口唇部は外側に曲げて玉縁状に仕上げられている。318はI区中層出土の鉄板(小札)の破片で鏽に覆われている。このほか図版10の右上に掲載した金属製容器がある。12cm×11cmで4～5枚の薄手の皿状の容器が接着している。また上部には全長1.8cmの裁頭円錐形の金属製品が接着している。金属器については今後の化学的分析をふまえて資料の性格が明らかになることが期待される。

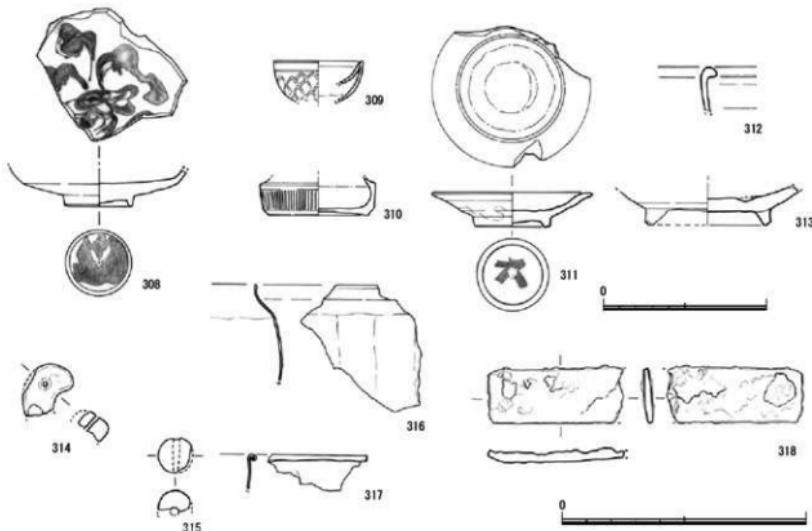


図40 博多遺跡群 229次出土遺物補遺 (1/3・1/2)



調査地点から地下鉄 3 号線呉服町駅方面をのぞむ（南より）



229 次調査 第 2 面発掘作業風景（西より）



石基礎上層全景（東より）



傲古銅器出土状況 石基礎 SX004 (西より)



有柄片口銅器出土状況 石基礎 SX004 (東より)



石基礎上層全景（北より）



石基礎下層全景（南より）



石基礎下層全景（北より）

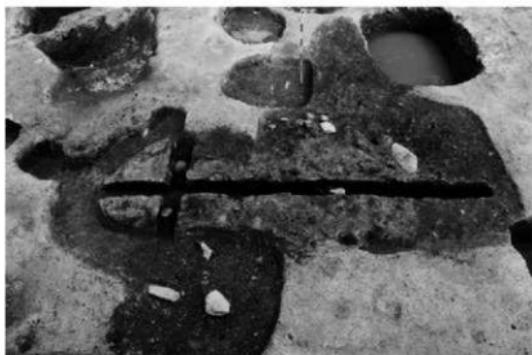


石基礎下層と区画溝 SD042（東より）

図版 4



鋳造関連遺構 SX008・011（北より）



鋳造関連遺構 SX008（北より）



鋳造関連遺構 SX008 調査風景（北東より）



道路状造構全景（南より）



道路状造構 SX046・SD049 土層断面（南より）



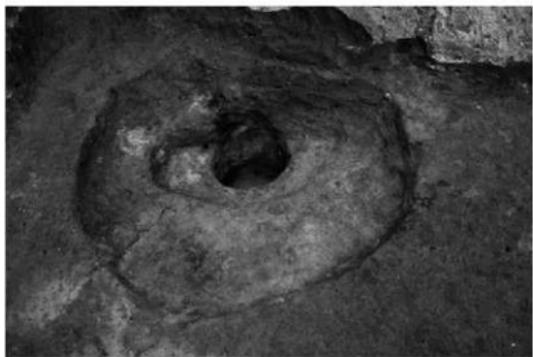
溝状遺構 SD059（南より）



井戸 SE057（南より）



I 区第 3 面井戸検出風景（南より）



井戸 SE066 (東より)



井戸 SE065 (東より)

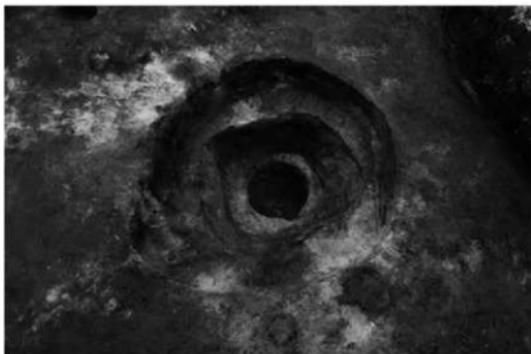


井戸 SE063・064 (東より)

図版 8



井戸 SE069・070 (南より)



井戸 SE069 (東より)



井戸 SE070 銅鏡出土状況 (東より)



I 区北壁土層 1 (南より)



I 区北壁土層 2 (南より)



I 区北壁土層 3 (南より)



250

銅鏡 SE070



金属製容器 1 I 区 1 ~ 5 層



2

有柄片口銅器 SX004



47

銅權 SX008



48



49

環珞・不明銅器 SX008



316

金属製容器 2 I 区 1 ~ 5 層



317

金属製容器 3 I 区 1 ~ 5 層



318

鉄板(小札) I 区 3 ~ 4 層

報 告 書 抄 錄

博多 176

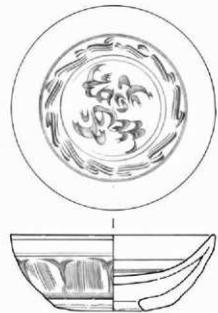
—博多遺跡群第 229 次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 1419 集

令和 3 年 3 月 25 日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 正光印刷株式会社
福岡県福岡市西区周船寺 3 丁目 28-1
電話 (092) 806-5708

The General Report on
the 229th Survey of Hakata Ruins



2021 Mar.

Board of Education of Fukuoka City